
魔族の涙と神の涙

鮮音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔族の涙と神の涙

【Nコード】

N00371

【作者名】

鮮音

【あらすじ】

ある日現れた不思議な少女。少年、聖原神夜ひじりはら・しんやはその少女との出会いによって、非日常へと身を投じる事になる。真の正義は何なのか。正義と悪、神と魔族。運命に翻弄される少年少女達の物語……

プロローグ

聞こえる雨の音。

雨は無慈悲に、ボクの身体を叩く。

ボクは地面に倒れている。

だが、地は血で染まっている。

紛れもないボクの血で……

「ああ、月が綺麗だなあ……」

天を見上げ、そんな事を呟いてみる。

すでに両の目から見える世界は霞み、月はぼんやりとした輪郭しか見えない。

2

それは『確実な死』からの逃避でしかなかった。

死をもたらす者が、一步、また一步と近づいてくる。

鼻息荒く、紅い眼を細めながら歩を進める異形の者。

視力が無くなっている所為か、不思議と先程まで感じていた恐怖はない。

異形の者は、その大きな手でボクの頭を掴む。

気が狂ったのか、ボクは口元に笑みを浮かべていた。

手に力が込められ、凄まじい痛みが奔る。

意識が遠退く最中、最後に浮かんだのは。

あの不思議な少女の優しい笑顔だった……

第一章　二人の出会い

雪が降っていた……

ただ静かに、ゆっくりと……
手に乗るとすぐに形を変えてしまう。

今年も冬が訪れていた……
雪が降るなか、傘もささず。

蟻のような集団があった……
父親が死んだ。

ボクは何も感じなかった。
ただ時間が過ぎるのを待っていた。

姉が話をしていた……

親戚から励まされていた。
会話の途中、親戚達がボクに視線を送る。

奇異、嫌悪の眼差し……

だが、そんな物どうでもよかった……

父が死に、母も昔に亡くなった。

だが、両親の死など些末な事でしかない。

蟻共を見つめ、ボクは時間が過ぎるのを待った。

その瞳に純粋な殺意を湛えながら……



「……ちっ」

舌打ちをしながらボクは身を起こした。

自室には何もない。ベッドとタンス、そして小さな机があるだけだ。

目覚めは最悪。だが、再び寝れそうにもなかった。

暦は十二月。ボクは閉めきっていたカーテンを開いた。

空から舞い降りる白い綿。

雪だった……

「8年前……か」

恐らく、雪が降っていたからだろう。

あんな夢を見たのは……

「……ちっ」

もう一度舌打ち。

仕方なくボクは部屋を出た。



階段を下りて洗面所へ向かう。顔を洗いたかった。

鏡の前に辿り着く。

鏡に映る自分を見る。

適当に肩口で切られた黒い髪、前髪は目にかかる程。男のくせに女のように大きな目。

眉間には皺を寄せ、鏡の向こうからこちらを睨んでいた。背も大きくない、まるで女の子だった。

「滑稽だな。聖原神夜」

自分を睨みつける自分に悪態を吐いた。

歯を磨き、顔を洗う。

そして今更ながら時計を見た。

7時半……

休日の朝に、何故こんな早くに……

全てはあの夢の所為だ。

両親の葬式。今日のように雪の降る朝だった。

ガシャン

苛立ちを、近くにあったゴミ箱にぶつけ、ボクは居間へ向かった。



居間に入ると机に書き置きがあるのが目に入った。

二人暮らしにも関わらず、数人が一度に使える机。

姉曰く、ボクの友達が来た時のためらしい。

ふとその事を思い出してしまい、ボクは殴るように書き置きを取った。

苛ついている。全部あの夢の所為。

ボクは書き置きに視線を落とす。

そこには、『仕事が入った。昼は冷蔵庫』と書かれていた。

どうやらボクが朝を食べないのは決定事項らしい。

冷蔵庫を開き、中を確認する。……昼食以外何もない。

そう分かると急に腹が減ってきた。

「何か、買いに行くか」

誰に言うでもなく、ボクは呟いた。



まだ雪が降っていた。

ボクの頬に落ち、水滴に変わる。

ボクはそれを拭おうとはしない。

しばらくしてボクは歩きだした。

近くのコンビニにいこう。何かあるはずだ。

休日の朝に外を出歩くやつは少ないだろう。いるのは犬の散歩をしている人ぐらいだ。

「あつ、聖原くんっ」

後ろから明るい少女の声が聞こえた。

ボクは溜め息をつきながら振り返る。きっと眉間には皺が寄っているだろう。

「何？おうか・そら桜花空」

振り返った先にいた少女。桜花空。

同じ中学に通い、偶々同じクラスなだけの女子だ。ボクも背は低いがコイツはさらに低い。

大きな小動物のような目でこっちを見上げてくる。栗色の髪は

肩口で揃えられていた。

何故かコイツは最近よく話し掛けてくる。ボクからしたらうざったいだけなのだが。

「なっ、何でフルネームなんですかぁ……」

しゅんと俯く空。その行為が更にボクを苛つかせる。

「用が無いなら良いですか？早く行きたいんですけど」

「えっ、あ、私も行きますっ」

何でだよ……、ボクは聞こえないように舌を打った。

「寒く……ないんですか？」

空がボクの格好を見て言う。確かに寒い。

ボクは適当に引っ張りだした服を着ている。それに対し空は、いかにも暖かそうなコートを着て、手には手袋を着けていた。

「関係ないだろ」

「関係あります、私達は友達です」

いつからだよ。

そう口にしようとした時。

「んなあっ?! 神ちゃんやないかぁ!……ついでに空も」

煩いのが来た。

「今日は厄日だ」

ボクが肩を落とす隣で。

「ちょっとお！何で私はついでなのよ?!」

空が目くじらを立てていた。

「お前なんかついでで十分や、このドチビ」

「誰がドチビよ!この……」

空はそこで詰まる。相手の容姿に欠点が見当たらなかったからだ。

空が話している相手。

パツと見180程はあるだろう。すらりとした体躯、所謂八頭身だ。

防寒具は手袋のみ。流石に寒そうだが、本人のテンションからは関係ないという事が分かる。

切れ長の目、ライオンのような金髪。

それがこの男、九条学^{くじょう・まなぶ}。空と並んでボクに必要以上に絡む奴だ。

ゆっくりと近づいてきて、膝を曲げ、整った顔でボクの顔を覗いてきた。

「遊びに行こうぜ? 神ちゃん」

関西訛りで喋る学。おそらく、関西出身なのだろう。
だが、遊びなどボクは興味が無い。

いや、他人すらどうでもいい。親戚も、肉親も……

「何が友達だ」

無視して歩きだす。

「し、神ちゃん?!」

「友達？ふざけるな……」

ボクは吐き捨てる。

そして、二人を見る。

「ちっ、死ねよ」

簡単に口から出た呪いの言葉。でも、これがボクの本心。

「もうボクに構うな」

住宅街の細い道。雪の舞う地に、ボクの声が残響した。



「やっぱりダメかあ……」

取り残された学は、肩を落としながら溜め息をついた。

「はぁ……」

横にいた空も溜め息をつく。

ここ二カ月、誘い続けているのだが全く脈が無い。

「また明日、頑張ってみっか」

「そうね」

諦めの悪い二人だった。



コンビニを出る。雪は止んでいた。

「……」

空を見上げてみる。晴れ間が覗き、日の光が差し込んでいた。

自然と自分の顔が綻ぶのを感じた。

雪が嫌い。それはあの日の記憶が起因しているのだが、何故かそれだけでは無いように感じる。

「なんだって言うんだ？」

日差しが眩しい。積もった雪にも反射し、目が眩む。
みゃあ……

「あ？」

猫の声だろうか。

「あっちか？」

声がしたのはコンビニの角の方だ。ボクの足は自然とそちらにむかっていた。

みゃあ……

近くなっている。

ボクはコンビニと民家の隙間を覗いた。

はたして、そこにいた。

「何やってんだよ……」

猫は足に怪我をし、寒さに耐えるように身を縮めている。野良猫のようだ。

手を伸ばす。猫は警戒して毛を逆立てる。

「大丈夫」

自分の物とは思えない程に優しい声だった。

人は嫌いだ、動物は好きだ。劣等感も、恨みも持たない。穢れの無い純粋さがあるだけだ。

「ほら、ここに」

手を開く。猫は人差し指に噛み付いた。

「大丈夫だよ」

痛みを堪えながら笑みを作る。心配させないように…
猫の警戒もとけたようで、噛むのをやめてくれた。

そして手に乗ってくれたので、そのままゆっくりと出してやる。

「大丈夫か？寒かっただろ」
みゃあ…

小さい声で答えた猫は、想像よりも一回り小さかった。
優しく抱いてやる。すると、身を丸めてまた一つ鳴いた。

「……………」

純粹にいいとおしいと感じた。だが、この感情は人には一生感じないだろう。

猫は傷を舐めた。その行動一つがまたいいとおしい。

ボクは似合わない笑みを浮かべながら帰路についた。



家について、ボクは居間にパンを置き、猫を風呂場へ連れていく。

猫を温めるためのお湯を用意する。

用意したお湯で猫を洗ってやる。すると先程までは分からなかったが、猫はとても綺麗な白猫だった。

「綺麗だな」

にゃあっ

誉められたことが分かるかのように猫は鳴いた。

不思議とこの猫は水を嫌がらない。ボクのことを信頼しているというのなら、それはとても嬉しい事だ。

タオルで水を拭き取ってやる。嬉しそうに猫は鳴いた。

「名前が無いのは不憫だよな……」

みゃあ…

本当にこの猫は言葉が分かる。そんな気がしてきた。

「んう……」

頭を捻る。だが思いつかない。

みゃっ

期待に満ちた目でボクを見上げる猫。

ボクは一つ思いついた。

「エンジェ……」

みゃ？

Angelica（無垢）をいじった名前だ。この白猫には丁度いい名前に感じた。

「お前は今日からエンジェだ」

みゃあっ

ボクの言葉に、エンジェは喜びを体で表現する。

ボクの肩に登り、顔を舐めてくる。

「くすぐったいよ」

みゃっ

舐めるのをやめても、肩からは降りようとはしない。小さな猫だからいいのだけど……

居間へ移動する。

椅子に座ると、エンジェが膝にちょこんと乗った。

パンの袋を開けると、エンジェはじいっとそれを見つめる。

「…ちょっと待ってな」

エンジェを膝から降ろし、冷蔵庫の扉を調べに行く。

中を物色すると、鯖缶を見つけた。

「ほら」

開封してエンジエの前に置く。

みゃあ

目を輝かせながら鯖を頬張るエンジエ。相当腹が減っていたようだ。

ボクも椅子に座り、パンを頬張る。

いつもとは違う、面白い食卓だった。



二階の自室に移動し、課題を広げた。

エンジエはベッドでとぐろを巻き、静かに眠っている。

課題は数学、ボクの得意科目だ。これに関しては誰にも負ける気がしない。

程なくして課題は終了する。

エンジエに占領されたベッドを見る。

相も変わらず、エンジエは眠っている。

ボクは床に転がる。

眠ってしまったおうとも思ったが、イマイチ眠気もない。
時計を見る。針は11時を指していた。

「……昼、食べようかな」

少し早いが、昼食を摂ることにする。

ボクの声に反応して、エンジェがむくりと起き上がる。……食い意
地のほった奴め。

階下に下り居間に向かうと、姉が椅子に腰掛けていた。

聖原^{かな}神流。ボクの姉だ。

背はボクより少し高い程度。ボク同様の黒髪は腰の辺りまで伸びて
いる。

切れ長の目は、どちらかと言えば男性的な雰囲気がある。

顔自体は整っていると、誰かが言っていた気がする。本人だった
か……

掛けてあるコートが濡れているのを見れば、今さっき帰って来たの
だろう。

外を確認する。案の定、雪がまた降っていた。

それだけで、ボクは嫌な気持ちになる。

「お、神夜。ただいま」

こちらに気付いた姉がボクに声を掛けた。

「……………ああ」

短く答え、冷蔵庫から昼食を取り出す。そして、敢えて正面にならないように一つずらして座る。

代わりにエンジェが姉の向かいに座る。

姉はエンジェを見て、笑顔を浮かべた。

「何だ？捨て猫か？」

エンジェから視線を外さず、姉はどこか嬉しそうに言った。

「……………違う」

ポテトサラダを口に運びながら答える。

「じゃあ、どうしたんだ？この子」

「関係ないだろ」

うざったい……………

「関係ないって事はないだろ？」

「……………」

嫌い……………

人と話しているだけで気分が悪くなる。それは親族も一緒だ。

いや、親族だからこそ……

「なあ、神夜？」

「うるせえっ！！ボクに話しかけんなって、いつになったら分かるんだよっ！！」

ダンッ

「話しているだけで反吐が出る！！どうせテメエもボクが殺ったと思ってるだろ！！」

隣でエンジェが跳ね上がるのが分かった。ボクは激情を抑えることなく吐き出し続ける。

「わ、私は…そんな事っ」

「喋んな！！テメエも一緒だ！！アイツ等と！！！！」

食べ掛けの料理を残し、ボクは居間を出た。エンジェもボクを追い、居間から出てきた。

「神夜っ！！」

姉が叫んでいたが無視し、階段を駆け上がる。自室に入り、鍵を掛ける。そしてそのままベッドに倒れこんだ。

畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生ッッ！！

雪も、姉も、ボクを乱す。

「畜生っ……」

エンジェはちょこんとベッドの下に座っている。

次第にボクは、深い眠りへと落ちていった……



雪が降っている。

冷たい、とても冷たい雪が……

地に積もる雪。

それは不自然な赤だった。

ボクの衣服も深紅。

自宅の天井に不自然な穴。

舞い降りる雪。

前に倒れる不自然な物。

先程まで、父と呼称していた『物』。

震える姉。吹き飛んだ屋根。深紅の父……

今日は不自然な物ばかりだ。

「父さん。どうしたの？」

触れる。揺する。触れる。揺する。揺する。揺する。
手には父の赤。

服にも父の赤。

ボクの全身が赤。

赤赤赤赤赤赤赤赤……

それでも……

ボクは父を揺すり続ける…



「うわあああっ!!」

ボクは跳ね起きた。身体中、嫌な汗をかいている。

エンジエが何事かと、部屋中を走り回っている。

「はあっ…はあっ…」

息が荒い。呼吸が乱れている。

エンジエが隣へ来てくれた。そのお陰で、幾分か落ち着く。

「あの夢か……」

父が死んだ時の、殺された時の夢……

今尚、脳裏から離れない光景……

「っ!」

激しく頭を掻いた。

エンジエがボクの膝に乗る。小首を傾げ、ボクの顔を覗き込む。

「あ、ああ……ゴメン。心配かけたね」

みゃあ……

エンジエの頭を撫でる。だが、エンジエは悲しそうな声を出した。

時計を見る。

6時……

意外と長い時間眠っていたようだ。

昼食が中途半端だったため、腹が減っていた。
気が進まないが、居間へ向かうことにする。



居間に行くと、またテーブルの上に一枚の書き置きがあった。

『仕事に行ってくる。今日は帰れない』

ありがたい。ボクは冷蔵庫から昼食の残りを取出し、机の上に置いた。

エンジエが食品を食い入るように見つめている。……まったく、この

猫は。

「ほら」

昼には手を付けなかった鮭を、エンジェの目の前に置いてやる。

みゃっ

短く鳴き、勢いよく鮭を頬張る。見ているこちらにも嬉しくなってくる程だった。

料理を作る人の気持ちはコレよりも大きいのだろうか……

アレを許すつもりはないが、胸に小さな針が刺さるように感じた。

ほんの少し後悔。

足元で鮭を食うエンジェを見る。依然、その表情は変わらない。

「本当に幸せそうだな。エンジェ」

みゃ？

エンジェはボクを見上げる。……少し癒された。

食事を終え、食器を片付ける。

テレビを点ける。丁度、夕方のニュースがやっていた。

『た、只今入って来ましたニュースです』

キャスターが慌てた様子で、手渡せられた原稿に目を落とした。

ボクはぼーっと画面を見つめている。アレが『緊急の仕事』で出たから、ニュースの内容が変更になるのは分かっていた。

『現場の聖原さん？ 聖原さん？』

テレビの画面に先程までここにいたアイツがマイクを持ち、崩れたビルの前に立っている。

これがアイツの仕事なのだ。

高校を二年で中退し、就職。学歴のハンデを持ち前の行動力、判断力で補っている出世頭……と、誰かが言っていたような気がする。

ちなみに、報道以外にも編集等もしているらしい。

過労死しないか不安を感じる者も多い……と、これも誰かが言っていたような……

「……………」

誰だったか……

「まあいいか」

重要性はないだろう。

アイツが立っていたのは近所なビルだ。改めてよく見てみる。

「……………」

見間違いだろうか、ビルの中に誰かがいたような気がした。

「気のせい…か？」

そう思ったが、この事が頭から離れることはなかった。



プルルルルッ…

電話が鳴っている。

震える手で、ボクは受話器を手取る。

「はい……聖原です……」

受話器の向こうから聞こえる声。

「本当の子じゃないくせに」

ガチャツッ…ツ…ツ…

受話器を置けばまた鳴り響く。

ボクは震える手でまたそれを手に取った。



「また……」

またあの頃の夢だ。

やはり外は雪が降っていた。

大きな溜め息を一つ、身を起こし、時計を見る。

6時。

「起きるか…」

エンジェは足元でまだ気持ち良さそうに眠っている。
起こさないように気を付けながらベッドから下りる。
制服を取出し、それに着替える。

いつもと変わらない、変化のない朝。無味乾燥な日々。

親戚からは後ろ指を指され、他人を嫌い、遠ざける。
それもあの日から、父が死んだあの日から。

ボクは誰が必要としていないし、誰もボクを必要としていない。

「はぁ……」

着替え終わり、また一つ大きな溜め息が出た。

「所詮他人なんて信用できない」

そうだ、他人は所詮他人。

唯一信用した父も死に、世界に味方がいなくなったあの日から……

分かっていた事だ……



退屈な時間の終わりを告げるチャイムが鳴る。と言っても、ボクに楽しい時間などないのだが。

ボク以外の奴等はさっさと帰路につく。

一応、ボクも三年だ。今年は受験がある。

「神ちゃんっ」

背中に何かがボクに覆い被さった。

「離せよ」

乱暴に振り払う。

学だった。相変わらずコイツは……

「絡むな。ボクは誰とも遊ばないし、友達もいないんだよ」

「……………」

黙った学を置き去りにして、ボクは教室を出ようとした。

「なあ、神ちゃん」

学がボクを呼び止めた。

無視すればよかったのだが、何故か足を止めてしまった。

「何だよ」

ボクの言葉に学は口を開く。

「神ちゃん、無理してないか？」

独特の関西訛りで学は言った。

「無理？ボクが？」

「ああ、そうや」

ボクの問いに、学は真面目な顔をして頷いた。

「無理なんかしていない。ボクは一人が良いから一人でいるだけだ」

突き放す。だが、学は気にした様子もなく答える。

「それが無理しとるいうんや」

静かに、ただ静かに言った。小さな声だったが、誰もいない教室にはよく通った。

「そうやって突き放して、ホントは友達が欲しいんちゃうんか？だから……」

「……うるせえよ」

学の言葉を遮る。

結局、コイツは何も分かっていない。話していても無駄だった。

「誰が無理してるって？勝手な口上たれてんじゃねえよ。友達が欲しい？ふざけんな。そんなもん、欲しいと思ったことはない」

静かだが、自分でも分かるぐらい殺気立った声だ。

「所詮他人。誰もボクの事は理解できない。だから……」

呆然としている学の前に立つ。そして、学の胸に手を当て。

「これ以上話し掛けるな」

手に軽く力を込める。学が倒れて床に転がった。

ボクは踵を返し、教室を出た。



夕暮れの街。ビルは赤く染まり、地に積もる雪も同様に染まっていた。

赤く染まる雪を見ると、記憶が蘇る。

早く帰リたかった。だが、ここは通学路ではない。

それでも来たのは昨日のニュースの所為だった。

崩れたビルの中に見えた人影。見間違いでなければ女性のように見えた。

立ち並ぶビル。普段から然程人気は多くはない道だが、昨日の一件があつた所為で出歩く人は全くない。

閑散とした道。まるで、ここ一帯が廢墟となつたようだった。

崩れたビルを探す。この辺りの筈だ。



ボクは暫らくの間、休むことなく歩き続けた。

私はやることもなく、ただただ空を仰いでいた。

私の身勝手で、一体どれだけの人が被害に遭つただろうか。

そればかりを考えていた。

私はどうすれば償える？

私はどうすれば許される？

私は……どうすれば……

眼下には、崩れたビルが見えていた……



「ここ……だよな」

探し始めて約一時間。ようやく件のビルを発見した。

警官が大勢警備していると思ったが、調査が終了したらしく、極少数の警官しか見当たらなかった。

改めてみると、損壊は中々に酷く、一部のみが不思議と削り取られているようにも見えた。

人影が見えたのはビルの入り口。侵入禁止のテープが張られていた。

そこを見ても仕方がない。ボクは周囲を見回す。

何故、いるかも分からない、もしかしたら見間違いかもしれない人物をここまで必死に探しているのか、ボク自身さっぱり解らなかった。

それでもボクは必死に探した。そして。

「……いた…」

見つけた。向かいのビルの屋上。女性の影……

「…………っ！」

その影を見た瞬間。ボクは駆け出していた。

あの人に、どうしても会わなければいけない。そう思った。

入ったビルは、使用されていなかった。エレベーターも動かず、階段で必死に上を目指す。

階数は多くはないが、それでも息がすぐに上がり、冬の冷たい空気が肺を刺した。

「はあっ…はあっ…」

呼吸が荒れ、脚が疲れる。だが、足の動きを止めない。いや、止められなかった。

二分程駆け上り、屋上への扉に辿り着いた。

呼吸を整える。そして、ゆっくりと扉を開いた。



扉の先。そこは地上から見る街、世界とは異なる場所だった。

広く、何もない殺風景な空間に…少女は立っていた。

雪の積もるコンクリート。地上と同じように赤く染まっていた。だが、その光の反射が少女を綺麗に映えさせていた。

少女がこっちに気付き振り向いた。

金色に輝く、若干雑に肩口で揃えられた髪。

この世の物とは思えない程整った顔。

強気な性格が伺える吊り上がった目尻。瞳は赤く、見る者全てが吸い込まれるようだ。

身体は、見たことの無い、黒い服に包まれていた。

少女から醸し出される不思議な雰囲気……いや、美しさに、ボクは言葉を失っていた。

ボクが呆然としていると、少女が口を開いた。

「……………誰だ」

凜として、透き通った声。

その声にボクはまた、言葉を失った。

「……………誰だと聞いている」

返事をしないボクに、少女は先程よりも語気を強めて聞いてきた。

ボクは、乾いた喉から無理矢理声を絞りだした。

「…はじめ、まして…」

「ああ、初めまして」

少女は答え、優しく微笑んだ。

ボクの運命の歯車が……

静かに、回り始めた……

第二章〈過去・現在〉

次の日、ボクはまた廃ビルの屋上を訪れていた。

降り積もる雪が夕日で染まり輝く。

周囲を見回せば、同じようなビルの頭が見える。ここだけが地上から隔離された世界。

雪が嫌いなボクも、この風景は好きになれた。無骨なビルの群れも、この一時のみは素晴らしく、掛け替えの無いものに姿を変える。ボクは隣に座る少女に視線を移す。

少女は金髪を弄りながら何かを考えていた。

少女の名前はシーフィ。

その独特な、まるでどこかの民族衣裳の様な服に身を包む、名前以外は全てが謎の少女。歳はパツと見、十五、六といったところか。

他人嫌いのボクが、どうしてこの少女に会いたいと思ったのか、それはボク自身分らない。

だが、彼女から感じる雰囲気は、ボクの心を落ち着かせた。それが、自己紹介以降一つの会話もしていないのに、今日ボクがここに来た理由だ。

「ねえ…シーフィ」

意を決し、シーフィに声を掛けてみる。

彼女は数秒遅れてから。

「……………何だ？」

と答えた。

話題を考えていなかったボクは慌て、咄嗟に疑問をぶつけていた。

「どうして、ここにいるの？」

「……………」

言った後に、ボクは地雷を踏んだと確信した。彼女が息を呑むのが分かったからだ。

「……………お前もそうだろう？」

「…あ、あはは、そうだね」

シーフィが発した言葉に相づちを打つ。

どうにかして会話をしようと、必死に考えていると。

「…なあ、神夜」

意外にもシーフィが沈黙を破り、初めてボクの名前を呼んだ。

「……………いや、何でもない」

だが、シーフィ自ら会話を切ってしまった。でも、ボクは嬉しかった。今日の収穫は、会話こそ出来なかったが名前を呼んでもらえた。

という事だろう。

ちらりと空を見る。幻想的な時間は終わりを告げ、漆黒の闇が迫ってきている。

暗くなるまで居ては危険だろう。冬の陽の長さを恨みながらボクは帰路につくことにする。

「シーフィは家どこなの？」

自然と言葉が出ていた。普通は聞けない事が何故かさらりと口から滑り落ちていた。

「……………ない」

シーフィは呟く。確かに彼女は今『ない』と言った。

「…じゃあ、昨日も…ずっとここに？」

「……ああ」

ボクの問いを、彼女は肯定した。

耳を疑った。信じられなかった。寒空の下、こんな所で寝泊りなんて普通じゃない。それに、不憫過ぎる。

「……お前が気にする事じゃない」

表情に出ていたのだろうか。シーフィは少し表情を和らげ、ボクを心配させないように微笑む。

「…いや、でも…」

後の言葉は出てこない。会ったばかりの男が家に呼ぶなんてもって

の他だ。

「もう帰れ、暗くなるとこの辺りは危険だ」

「……うん」

彼女に促され、ボクは帰路に着いた。何も出来ない自分に腹が立った。

帰り道は漆黒の闇に包まれていた。

◇◆◇

無言で家のなかに入る。鍵が開いていたから、姉が帰宅しているのだろう。

みゃあ…

エンジエが足元にいた。

エンジエは甘えた様な声を出しながら、ボクの足に擦り寄ってきた。その姿が愛らしい。

姉に気付かれるのも嫌なので、エンジエを抱え上げ、ボクは二階へと上がった。

◇◆◇

自室に入っても、特にする事はない。溜め息を吐きながら、ベッドに身を横たえた。

寝返りを打ち、仰向けになる。

天井を見上げ、シーフィの事を思い出した。

屋上に一人の不思議な少女。ボクは何故彼女に惹かれたのだろう。

あの独特な雰囲気？　いや、違う。

あの美しい容姿に？　—それも違う。

ボクが彼女に惹かれたのは、もっと深く、根本にある気がした。

みやつ

エンジェがベッドに上り、ボクに戯れついてきた。

頭を撫でてやる。するとエンジェは嬉しそうな声を出し、目を細めた。

ここ数日。大嫌いな雪が降り続き、例年なら苛立ちが一層激しくなるところだが、今年は殆ど無い。

それもエンジェやシーフィとの出会いのお陰だろうか。ボクは幸せそうなエンジェに。

「ありがとう」

そう呟いていた。

みゃ？

エンジェは不思議そうにボクの目を覗き込んだ。

明日もあのビルへ行こう。ボクはそう思った。



「……」

朝、玄関から外へ出た時、ボクは言葉を失っていた。

ボクを啞然とさせた主は、出てきたボクに笑顔で手を振った。

主、桜花空はボクの目の前まで小走りでやってきた。

「おはよう、聖原君」

「……」

無視をして隣を通り過ぎる。空が焦ってボクの服の袖を掴んだ。

「何だよ」

乱暴に振り払う。空はムツとした表情で見上げてきた。

「良いじゃないですか、友達なんですから」

「いつなっただよ」

空の中でボクは既に友達になっているらしい。信じられない程能天気だと思う。

「友達は気付かぬうちになってる物ですよ」

どこかで聞いたようなクサイ台詞を言う空。ボクは哑然呆然。ポカンとしているボクの腕に、空は自身の腕を絡ませてきた。

「なっ……」

「学校、遅れますよ?」

自分の顔が赤くなるのが分かる。突き離そうにも、女に暴力するわけにはいかない。

「早くっ!」

空はボクの腕を引き、ボクはされるがままについていく事になってしまった。



教室に到着し、ボク達はそれぞれの席に座る。

その途中、学の席を見る。

「九条君、大丈夫かしら」

「心配だわ……」

そんな女子の声が聞こえた。

学は容姿が良好なため、校内で学に好意を寄せる女子は少なくない。最も、ボクにとってはどうでもいい事なのだが。

学は昨日学校へ来なかった。その事で女子は不安感を募らせているようだ。

ガラッ：

不意に教室の扉が開く。学だった。

「お早う、皆さん」

中途半端な関西弁を聞き、数名の女子が学へと駆け寄る。そして、学の身を按じる言葉を掛ける。

「九条君…その怪我は…」

一人の女子が学の怪我に気付いた。

学ランの上からで良くは見えないが、胸の辺りを包帯で固定しているように見える。そうだ、あの位置は……

「いやあ、参った。風呂場ですっ転んで胸強打したんやからなあ」

完全な嘘。ボクには分かった。

学は笑顔をこちらに向け。

「お早よう！神ちゃん！」

そう言った。

何故、どうしてそのような笑顔を向けられるのか分からない。

ボクは返事をせず、ずっと窓の外を眺めていた……



「神ちゃん一緒に食おう」

給食の時間、別の班の学が机を寄せてきた。

「あ、私も」

空までもが机を寄せてくる。

この二人はクラスの人気者だ。男子、女子両陣営の視線が刺さる。

「断る」

ボクは短く答え、二人と距離をとった。それでも二人は構わずその距離を詰めてくる。

何度距離を開いても詰めてくる。最終的にはボクが折れる形になってしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

無言の食事。ボクからしたらそれで一向に構わないのだが、二人は何やら落ち着かない様子だ。

「ね、ねえ…」

空が口を開く。ボクは給食の味噌汁を飲む。

「え、えーつと…」

いい加減、見ていて苛立ってきた。コイツはボクと話す時だけこのようになる。

話しにくいなら最初から声を掛けるなと思う。

「何だよ」

ボクが睨むと、空は肩をびくつかせ、小動物の様にこちらを見た。瞳は潤んでいる。

「その…ごめんなさい…」

空が謝る横で、学が劇場の芸人ように転けた。

何をやってるんだ、コイツ等は……

「……あ…」

空がボクの顔を見て、小さく声を上げた。

「今、聖原君……一瞬だったけど…」

言葉の一つ一つを確かめるように、空は言う。そして、最後の言葉は満面の笑みで言った。

「……笑いました……」

笑った？ボクが？

自分の口元に手を当てる。……いつもと変わらない。

空は嬉しそうに笑う。学はようやく起き上がり、何が起こったのか分からない様子で、ボクと空を交互に見ている。

「……………っ！」

無意識にボクは立ち上がり、教室を飛び出していた。後ろから空と学の声が聞こえる。

声は次第に遠く、聞こえなくなる。それでもボクは走った。

『一瞬だったけど……笑いました……』

信じられないその言葉が、耳から離れるまで……



「はぁっ…はぁっ…」

息が切れる。足が重い。胸が熱い。

そしてボクは……

「何だ…今日は早いな」

またシーフィのいるビルへと来ていた。

シーフィが少し面食らった顔をした。

「ボクは今、笑ってる？」

気付くとボクはそんな事を口走っていた。訳が分からない。

「いや、死にそうな顔だが」

シーフィは冷静に答える。彼女の声を聞き、ボクは不思議と安心した。

足から力が抜け、ボクはその場に膝をついた。

「どうしたんだ？」

ボクの様子がおかしいことに気付いたシーフィが、ボクの傍へ来て、優しく肩に手を置いた。

何故だろう。やっぱり彼女と居ると心が安まる。そして嬉しくなる。

言い様の無い不思議な感覚……

ボクはシーフィに出会う事を望んでいた。そんな気がした。

「……………実は」

彼女には自分の胸中を全て話しても大丈夫。そう思ったボクは、先程の事だけではなく、『全て』を話していた…………



ボクが物心ついた頃。既に親族はボクを奇異の目で見ていた。

まるでドブ鼠を見るかの様な、冷たい瞳。

ボクはそんな視線に囲まれて生活していた。

とある秋の夕暮れ時。ボクは父と一緒に、川原を歩いていた。仲良く手を繋いで。

すぐ近くにある川。水音が優しい音色を奏でている。ずっと心が安まるのを感じながら、ボクは父を見上げる。

今ではもう、思い出せない父の顔を…………

「…………お父さん…………」

消えそうなボクの声。それは小さな水音にも消されてしまいかねない、小さな小さな声。

それでも父は、聞き逃すことなく答えてくれた。

「…なんだい？…神夜…」

ボクが口にするのは残酷な言葉。…そう、ボクは分かっていた。

何故親族は、ボクをあのように見るのかを……

「……ボクは…」

気付いていたのだ。ボクは……

「ほんとに…お母さんの子なの？」

自分が父と母の、本当の子ではない事を……

「……………」

父は無言でボクの手を強く握った。凄く暖かい、父の大きな手。

もし、父が本当の父で無くても、ボクが世界で唯一信じた人は……

「帰ろうか…」

この人だけだった……

「……うんっ」

無邪気な笑みを浮かべ、ボクは歩いた。



母は既に他界。事の真相を知るのは父だけだ。

だが父は、ボクが誰の子だと、何度聞かれても口を閉ざし続けた。
だからだろうか、ボクは愛人との間に生まれた、汚れた子だと言わ

れた。

家に居てもする事が無い。

ボクは広い床に、仰向けになったり、うつ伏せになったり。忙しく体勢を変え続けた。

とつとつとつ…

小気味の良い足音。その足音だけで分かる。…姉だ。

近所の高校に通う姉。今まで特に会話らしい会話をした記憶が無い。互いに距離を置き、牽制しあっている。

居間の扉が開き、姉が入ってくる。

一度目が合う。

だが、すぐに視線を外し、足早にテレビの電源を点け、ソファアに腰を落ち着けた。

きつと、コイツもボクを嫌っているんだ。そうだ、そうに違いない。

早く父が帰ってくることを、毎日願っていた…



秋が終わり、冬がやってくる。

父が帰ってきて、ボクは満面の笑みを浮かべていた。
金曜日。父はボクに言った。

「週末は遊びにいいかな…」

それを聞いたボクは、嬉しくて、楽しみで……

その夜はいくら目を閉じても眠ることが出来なかった。

明け方。変な音がして、居間に向かった……

そこからは記憶が無い……



気付くと雪に埋もれていた……

家の中に居た筈なのに……

隣が……赤い……

何が起こった？何があった？これは何？

隣に誰がいる……

それが誰かボクは知っている。それは……

「…お父……さん？」

間違いない。父だった……

身を起こし、父を見る。

腹が裂け、中身をぶちまけて、四肢は変な方向に曲がっている。そ

れなのに、顔は綺麗なまま……

空を見る。屋根がなくなって、雪が降っていた。今年の、初雪……

姉が遠くで震えているのが見えた。今はそんなのどうでもいい……

ボクは失ったんだ……

その日、突然……

世界で唯一の……

大切な味方を……



葬儀が執り行われた。その間、親族目に晒され続け、ボクは荒んだ。

姉は高校を中退して働き始めた。

ボクは何かのようになったのか、全く知らなかった。全て、姉が一人で決めていた。

ボクは一人ですっと引き籠もっていた。肩を震わせていた。恐怖に……怯えていた。

電話が鳴り、それを取る。

『愛人の子が』

それだけで電話は切れる。

また鳴る。取る。切れる。鳴る。鳴る。鳴る。鳴る……

「……何で居ないんだ……アイツは……」

……そうだ。

アイツが居ないのは当たり前なんだ。

電話が鳴る。だがもう聞こえなかった。

「つくく…あはは……」

笑いが漏れた。

「ミンナ死ンジマエ……」

アイツは助けに來ない、來る理由が無い。でも來ない理由は有る。

呪いの言葉を漏らして、ボクは笑った。

「アア、デモアイツハ駄目ダ。」

アイツが死んだら生活が出來なくなる。なら、願おう……

ボクを傷つける奴の死を……



「叔母さんが亡くなったらしいよ……」

姉が心痛な面持ちで目を伏せる。

ボクはそれを聞いて、無言で自室へ移動する。

「ははっ…あはははははははっ!!」

笑いが木霊した。



「願ったら皆死んだよ。偶然かもしれないけど、変な電話は無くな
った」

「……………」

狂った話だ。内容が支離滅裂。もしかしたら、狂ったボクの見た妄想かもしれない。

「なあ、お前は何が許せないんだ？」

シーフィがじつとボクを見て、いや、睨んで言った。

「……え？」

ボクは言われた意味が分からず、言葉を詰ませた。

「…私にはお前が…」

彼女は一言。ボクに言った……



自室に籠もり、膝を抱え、ボクは震えていた。

シーフィはボクにこう言ったのだ。

『お前は寂しがっているだけだ』と……

「ボクが……？」

そんな筈がない。しかし、彼女の言葉が、頭から離れない。

「寂しいのか？ボクは……」

分らない。自分の感情が……分らない……

みゃあ？

エンジェが心配そうにボクを見上げていた。

だが、エンジェに構っていられる状態ではない。

『後は自分で確かめろ』

彼女はそうも言った。

……そうだ。考えているだけじゃ埒が開かない。

自分で確かめるしかない。

ボクは腰を上げた……



居間に入ると姉が酒を飲み、夜食を摂っていた。

ボクに気付いていないのか、ずっと独り言を言っている。

「……………え…」

聞こえた姉の声。信じられない言葉……

次はよりはっきりと、鮮明に……

「神夜……ゴメン……」

涙混じりの声。静かにだが、姉は泣いていた。

「姉……さん……」

今まで、一度も姉と呼んだことはなかった。でも今は、自然と言えた。

言葉にした時、心が暖かくなった。

ボクの声に、姉は髪を乱しながら振り向いた。

「神夜……」

姉は驚いた顔をしながらボクの顔を見つめ、呟いた。

「……泣いて……いるのか？」

「えっ……」

顔を触る。目から大粒の涙が……零れていた……

膝から力が抜けた。その場にぺたりとへたり込む。

「ごめんなさい……」

何に対する謝罪なのか、ボク自身分らない。それでも、ボクは謝り続けた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

思えば、父が死んでから初めての涙かもしれない。

八年間分の涙。それは際限無しに溢れだした。

「大丈夫……私も……ごめんなさい……」

いつの間にか傍に来ていた姉がボクの肩を抱き、謝罪の言葉を口にしていた。

「私こそ…神夜が一番辛い時に、傍に居てやれなかった……」

そこまで言って、姉は泣きだした。

そこからはもう、会話にならなかった。

二人でずっと、夜が明けるまでずっと……

泣き続けた……



「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

姉とこうやって挨拶するのは初めてだ。

互いに目を腫らしている。

あれだけ泣けば当たり前だ。頭は痛いし、目は痛いし、それに眠い。

でも、気分はとても晴れやかだ。

これからの生活が楽しみになってきた。そして今日、もう一つやらなければならない事がある。

「おはよう、聖原君」

昨日同様、空が家の前で待っていた。

「……と、お姉さん？」

空が姉を見ておずおずと聞いた。

「ああ、聖原神流だ。よろしく」

姉は満面の笑みを浮かべた。こんな顔の姉を見るのは初めてかもしれない。いかに自分が時間を無駄にしていたか、それを痛感した。姉の笑顔を見て、何故か空は固まっていた。

「……です…」

「…え？」

「…え？」

空が口をパクパクと、まるで金魚のように動かしながら、何かを必死に言おうとしている。

ややあって、ダムが決壊したかのような勢いで…

「ファンですっ！サイン下さいっ！」

そう言っつて、紙とペンを突き出していた。



「ああ…まさか本当に姉弟だったなんて…」

「まさか……ボクに近づいたのはそれが目的？」

姉のサインに、恍惚とした表情で頬擦りしている空に、ボクはそう聞いた。

姉のサインに頬擦りをしている人を見ると、弟としては気味が悪い。

「いえっ、聖原君に近づいたのは、純粹に聖原君の事がす……」

ボンッ

空の顔が林檎になった。

わけが分からない。

こうも変なテンションでいられると、こちらも話を切り出すタイミングがない。

「あれ？今日は仲ええな」

通学路の辻路に差し掛かった時、いつもの中途半端な関西弁が聞こえた。

学が電柱に寄り掛かっていた。どうやら待ち伏せしていたらしい。

「お早う、神ちゃん」

「ああ、おはよう」

学の顔が、笑顔のまま凝固する。そして、その顔のまま空を、路の脇まで引っ張っていった。

しばらくして、二人は戻ってきた。そして、声を揃え。

「お早う、神ちゃん」

「おはよう、聖原君」

「ああ、おはよう」

同じ事を言われたので、同じように返した。

数秒の沈黙の後、学が…

「神ちゃあゝゝん」

何故か泣き付いてきた。コイツのテンションもおかしかった。

「は、放してくれ」

取り敢えず引き剥がす。学に抱きつかれると、ボクは完璧に潰される形になる。

そうでなくても引き剥がすと思うが……

「空……キミがそんな顔するのはどうかと思う。さっき、姉さんのサインに頬擦りしてたくせに」

呆然と立ち尽くして、口を開けてボーッとしている空。ボクは細やかな指摘をする。

「あ、いや、さっきは挨拶してくれなかったから……って、あれ？」

空が新しく違和感を感じたようだ。その違和感の正体に気付き、また嘔然とした。

「どうしたんや？空」

ボクに引っ付くのを諦めた学が、空の様子に気付いた。

「聖原君……もう一度、名前呼んでもらえますか？」

「……？」

空に言われた通り口にする。

「……空」

空と学が顔を見合わせる。

「神ちゃん、俺の名前も呼んでみてくれんか？」

「……学」

もう一度互いに顔を見合わせる空と学。次にこちらを向いた時、二人の目が少し潤んでいた。

「名前：初めて呼び捨てにしてくれましたね」

「空はええよ、俺なんか初めて名前呼ばれたんやから」

二人が口々に言う。

ボクも無意識だったから気付かなかった。自然と二人の名を呼んでいた。

その時、学校から予鈴が響いてきた。かなり長い時間が経っていたようだ。

「やばっ、いくで！二人とも！」

学が駆け出し、ボクと空はそれに続いた。



放課後。ボクと学、そして空の三人は教室に残っていた。

ボクが二人に話があると言って残ってもらったからだ。

「ごめん、二人とも忙しいのに……」

ボクは素直に謝罪する。ボク等は中学三年生だ。それぞれに受験が迫っている。だからこの教室にも、ボク等以外は誰もいない。

「いんや、ええよ？ どうせ神ちゃん、遊びに誘うつもりやったし」

「そうだね」

屈託の無い笑みをボクに向けてくれる。昨日までは嫌悪していた笑顔。それが今は無償に嬉しい。

ボクは自分の殻に閉じ籠もっていただけ。それで人に当たってしまった。悪いのはボク。これは言い訳できない事実。

だから、しなくてはいけない事がある……

ボクは二人を見つめる。

「その……」

口が渴く。喉まで出かかっているのに、出てこない。

二人は急かすことはしない。黙ってボクの言葉を待っている。

ゆっくり、ボクはそれを口にした。

「今まで…ずっとごめん」

先程の謝罪とは別の謝罪。

これが、ボクのしなくてはいけない事だ。

「二人は…今までボクを気遣ってくれていた。…それなのに、ボクは二人に酷い事を言ってしまった…」

二人は無言でボクを見る。決して茶化す事はない。

「それに、学には怪我をさせてしまった。…本当に…ごめん…」

後半は声が擦れ、小さくなっていた。それでも、最後まで言い切った。

許されなくていい。ただ、謝りたかった。

「確かに俺は、神ちゃんに怪我を負わされた…」

「……………」

学が口を開く。空は黙って学の言葉を聞いている。

ボクは心臓が止まりそうになる。仕方ない。それは真実だから…

学は言葉を続ける。それは、ボクは耳を疑った…

「…でも、俺は風呂で転けたと言った。……それで、ええんちゃうんか？」

「…………えっ…」

信じられなかった。あり得ない。

「いいわけないだろう?! ボクは許されなくて当然なんだっ! 何でそんな事を言えるんだよっ!」

叫んでいた。許された筈なのに、それをボクが許せなかった。

何が許せなかったのか、やっと分かった。

ボクは…ボク自身が許せないんだ…

肩に暖かい感触。学がボクの肩に手を置いていた。

優しい笑顔を浮かべていた。

「神ちゃんは気付いとらんけど、神ちゃんは優しいんや。…昔、何があったかは知らん。だから、それは神ちゃんの問題や…」

一度言葉を切り、呼吸を置いてから学は続ける。

「…でも、寂しいんやったら、一緒に居てやれる。…素直に謝った奴を、無条件で許してやれる。…それが…」

いつの間にか、空もボクの肩に手を置いていた。

空も学の言葉に耳を傾けていた。

「…………友達やろ? ……」

学の言葉を聞いたとき、ボクの中から涙が流れていた。夜、あれ程泣いたのに、また沢山流れてきた。

「私達が許すから、自分を許して上げて？」

空が言う。

どうしてこの二人が、ボクの友達になろうとしたのかは分からない。でも、二人の言葉は暖かい。今、ボクはそれだけで良かった。自分が満たされていく。口からは、言葉が漏れていた。

「…ありがとう」

ああ…本当に…

友達はいつの間にか出来ている物だったんだ……



二人は一緒に帰ろうと言ってくれたが、ボクは断った。

今一番に、感謝の気持ちを伝えたい人がいたから。

相変わらず、雪を見ると悲しくなる。それは仕方ない。

でも、これからは楽しい思い出を作ろう。今はそう思えた。

走る足も、昨日とは違い軽快だ。ボクの心は弾んでいる。

この気持ちを思い出させてくれた彼女に、感謝の気持ちを伝えたい。

ボクは走り続け、いつの間にか、いつもの屋上の扉の前に立っていた。

勢い良く扉を開く。

「シーフィ！キミのお陰……で…」

いつも通りの彼女が居るはず。そう思って扉を開いたボクは言葉を失った。

いつもは夕日の赤に染まる屋上の雪。

でも今日は……

「シーフィっ?!」

ボクはいつもの場所に居た、いつもとは違う少女に駆け寄った。

彼女はいつもの場所に倒れていた。

雪を染める赤……

今日の赤は……

彼女の鮮血だった……

第二章↳過去・現在↳（後書き）

指摘や分からないところがあれば、是非お聞かせ下さい。

第三章く彼女の謎く（前書き）

久しぶりの更新です。

遅くなり、申し訳ありません。

第三章　～彼女の謎～

血塗れの少女を背負い、ボクは闇を駆ける。少女・シーフィの吐息が、彼女の生を僅かに感じさせる。

最近、走ってばかりだな。と、少しふざけた事を考えてみる。勿論足は緩めないが…

人目につかないよう、最大限人気の無い道を選ぶ。

目指しているのはボクの家。

ボクが彼女を抱えたとき、彼女が言ったのだ。

『…病院は…駄目…』

擦れた声で、彼女はそう懇願した。理由は分からないが、必死に頼まれたら聞かないわけにはいかない。

それに、ボク自身も感じているのだ。本能で、彼女は『普通』では無いと…

恩人とも言える人を、『普通ではない』と表現するのは気が引けたが、その表現が一番しっくりくるのだ。

「…急がないとっ」

今それを考えても意味はない。ボクは思考を振り切り、足をより速く動かした。



必死に走ったが、やはりこの時期は暗くなるのが早い。

時刻は午後八時頃。この時間では、姉が帰って来ているか微妙な時間だ。

居ても困るし、居なくても困る。不思議な感じだ。

鍵を確認する。…掛かっていると言うことは、姉は居ない。そういうことだ。

鍵を開け、中に入る。そして、取り敢えず自分の部屋へ移動する。

みゃっ!?

エンジェがボクを見て、驚いたような声を上げる。どうやらシーフィを警戒しているようだ。

「…大丈夫だよ、エンジェ」

その声を掛けると、エンジェは短く一つ鳴き、ボクの足に擦り寄った。

自室に入り、シーフィをベッドに寝かせる。出血は止まっており、静かな寝息を立てている。

先程の状態が嘘のようだ……

「……どうしよう……」

この後一体どうすれば良いのだろうか。全く分からない。

「と、取り敢えず救急箱……」

確か救急箱は居間の棚にあったはず。ボクは階段を駆け降りる。

居間に入ると、机の上に書き置きを見つけた。

『緊急で仕事が入った。晩ご飯は出前で頼む』

相当急いでいたのだろうか。かなり乱暴な文字だ。

緊急で仕事が入ったのなら、明日の昼まで帰ってこない。過去がそうだったからだ。

「えっと、救急箱…救急箱…」

探せばすぐに見つかった。見つけた救急箱を抱え、ボクは自室へと戻った。

シーフィは先程と変わらず、寝息を立てている。シーフィの顔を、エンジエが覗いていた。

「ちょっとゴメン、退いてくれる？」

そう言ってエンジエを退かす。不満げな声を上げるエンジエ。そのエンジエを自分の脇に置く。

「さて……」

救急箱を開き、シーフィを見る。そこでボクは固まった。

「…」

彼女の傷は左脇腹辺りにあるようだ。血が滲み、黒い衣服が見て分かるほどに赤くなっている。見ていて痛々しい。

「えっと……」

つまり、傷を見るには服を脱がさなければいけないわけで…。ボクは迷っていた。エンジェがボクを見上げ、鳴く。

「……ふう…」

息を整え、ボクはシーフィの服に手を掛けた。

「ん…んう…」

「ひゃあっ?!」

シーフィが寝返りを打つ。ボクは奇声を上げ、手を離す。

「す…」

「……」

ここまで気持ち良さそうに眠っているのなら、治療は必要なのだろうか。そう思ったが、万が一と言う事もある。

決して邪な考えがあるわけではない……

再び彼女の服に手を掛ける。ボタンを一つずつ外す。

外している間は呼吸が止まっていた。全てのボタンを外し終え、ボクは入り口まで走った。

「はぁーっ、はぁーっ……」

息を強く吐き、呼吸を整える。心臓が早鐘の様だ。激しい鼓動を感じる。

だが、彼女の傷を確認しなくてはいけない。覚悟を決め、ベッドの傍へ戻る。

エンジェがボクを見る。どこか呆れているように見える。

…無茶言わないでくれ…

大きく深呼吸一つ。思い切って、シーフィの服を脱がせた。

「っ!?!」

先程とは違う意味で呼吸が停止する。有り得ない光景だ。

「…う、嘘…だろ?」

口から言葉が漏れる。

見えたのは彼女の綺麗な肌。透き通るような極め細やかな、美しい物だ。

だが、ボクが目を見張ったのはそこではない。

傷が、塞がっていた。

否、正確には塞がっている途中だった。

ゆっくりと、傷が消えていっていた。

ドスン、ボクは尻餅をついた。頭の中が真っ白だ。

シーフィに布団を掛け、ボクはベッドの横に背中を預けて座った。

「……」

天井を見上げていると、急に疲れが出た。もう考える事の出来ない脳は、静かな眠りに落ちていった。



「何よ…コレ…」

開いた口が塞がらないとは、まさしくこの事だろう。脳がまともに働かない。思考が停止している。

今まで、何度も現場は見てきた。だがこれは、比べ物にならない。

酷過ぎる…

赤い夕日が、その光景を更に哀しくしていた。

「…なさん、神流さん！」

「えっ…あつ、すまない」

声を掛けられていても気付かない程に、私は目の前の光景に意識を持っていた。

「いえ、仕方ないっすよ。こりゃあ、酷過ぎますからね…」

私に声を掛けた男。あまみや・やすし雨宮泰は、私の横に並び、真剣な目付きで惨状を見る。

スポーツ刈りの頭。顔は三枚目。背は私よりも1、2センチ高い程度。今年入ってきた新人だ。

「うわっ…似合わない…」

「なっ?! なんすかつ、人が真剣に話してんのにいつ?!」

私の一言にオーバーな反応を示す雨宮。心まで三枚目なのだろうか、コイツは…

「…はあ」

だが、ふざけても心にかかる霧は晴れない。

「神流さん…。コレ、報道しても良いと思いますか？」

雨宮が小声で私に聞いた。答えは決まっている。こんな物…

「出来るわけ…無いだろ…」

上から強力な圧力で押し潰された様なコンクリート。それは、かつての姿が思い出せない程。

元は人間だったと思われる、腕、脚……。瓦礫から突き出て、その生々しい姿を曝している。風景を染めるのは深紅、夥しい量の血だ。おそらく、規制がかかる。

「……ちっ」

舌を打つ。私は後悔していた。来なければ良かった……

報道の仕事をしてきて、このような感情は初めてだ。

瓦礫の一部に書いてある文字に目をやる。

『……総合……院……』

「……総合病院」

ここは、この街で一番大きな病院だった。この人達はここの患者だった。

警察官が、焦りながらブルーシートを掛けている。その内の一人が、一つの瓦礫に脚を引っ掛ける。

ガラッと、崩れる瓦礫。そこから赤黒い物が見えた。

「うぷっ……」

「……」

私は目を伏せ、どうにか耐えた。直視した雨宮は吐いた。だがそれ

も仕方がないだろう。

赤黒い物。人の頭部だ。

圧により、顔の原型は留めていない。破裂した脳天から中身ををぶちまけ、眼球は飛び出している。

それを赤く染め上げた血液は黒く変色していた。

「コレはまるで……」

淡い記憶の波が、私を呑み込もうと押し寄せる。私は首を大きく横に振った。

「聞き込み…行くぞ…」

膝をつき、虚ろな目をしている雨宮を視界の端に捉え、私は言った。



総合病院から離れた場所にある他の病院。総合病院程ではないが、器材など、しっかりとした物がそろっている所だ。

私と雨宮は、そこを訪ねた。

「すみません、お話を聞かせて頂けますか？」

医師に笑顔で名刺を渡す。眼鏡を掛けた、いかにも医者。といった

風格の男性だ。

「聖原…神流さんって、あの？」

名刺を睨みながら医者は言う。私は頷き、再度笑顔を作る。

「どうでしょうか」

医者は考え込んでしまう。まあ、急かしても仕方ない。私は病院内を見渡す。

総合病院程ではないが、それなりに大きい。設備も問題ないだろう。

私がここに来た理由。それは、今回の事件でたった一人の生存者が運び込まれたからだ。

「わあっ！ かなさんだあっ！」

突然背後から抱き付かれた。身体を反らせながらどうにか耐える。

「こらっ、雪音^{ゆきね}！ いけません」

そして、すぐにそんな女性の声が聞こえる。親子だろうか。

ちらりと後ろを振り返る。私の腰の辺りに、六歳程の栗色の髪を腰まで伸ばした少女がしがみ付いていた。

私を見上げる雪音と呼ばれた少女は、愛らしい笑みを浮かべ、その円らな瞳をこちらに向けていた。

「すみません、お仕事の邪魔をしてしまつて…」

母親が申し訳なさそうに頭を下げる。

「いえ、大丈夫ですよ？」

私は母親の方を向き直り、そう言った。

見れば若い母親だった。娘同様、栗色の髪を腰まで伸ばしている。年は二十代半ばといった辺りか。

「すみませんでした。ほら、雪音？行きましょ？」

母親が雪音のことを呼ぶが、雪音は私の服にしがみ付き離れようとしない。

「モテモテっすねえ。神流さん」

そんな事を言う雨宮の顔面を殴る。「ぶふおあっ!？」と、オーバーアクションをしながら吹っ飛んだ。

「かななさんとあそびたいっ」

雪音がそう言うと、母親は困ったように眉尻を下げた。それを見て、私は少し苦笑しながらこう言った。

「もう少しここに居ますので、その間なら…」

私の言葉を聞き、雪音の表情がパツと明るくなる。とても可愛らし

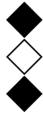
い。

母親は少し悩むが、「買い物をしてくる間だけ」と言って病院から出ていった。

「すみません。こんな状態になってしまって…」

医者に向き直り、私は謝罪した。だが、医者は首を横に振る。そして言った。

「その子なんです。例の生存者というのは……」



「何や？」

学は声のする方を見た。そこでは、神夜の姉、神流が数名と話している姿が見えた。

「おっ、神流さんやないか」

友人の姉、しかも美人という事もあり、学は声を掛けようと椅子から腰を上げる。

「…でも、仕事中っぽいからなあ…」

しかし、そう言ってすぐに腰を降ろした。流石に遠慮した方が良いと感じたのだ。

「九条さん。九条学さん」

そう考えていると、名前を呼ばれた。

「はいよ」

さつと腰を上げ、学は診察室へ歩いた。

「一日に病院二件かあ…、結構キツいなあ…」

そう呟きながら。



医者の話では、雪音は退院間近だったらしい。だが、今回の件に巻き込まれたため、外傷と、その精神状態を確認する必要がある、ここに運ばれたらしい。

「 kannasさんは、かれしとかいるんですか?」

最も、その必要は無かったようだが。

このような少女に、直接話を聞くのは良くないのだが、私はどうしても直接聞きたかった。

報道の人間として、ではなく、一人の人間として。

「ねえ、雪音ちゃん」

「なあに?」

雪音は私の言葉に反応する。私たちは椅子に並んで座り、雪音は私を見上げていた。

「どうやって助かったの？あの場所から…」

「えーっとね…」

医者の話では、雪音はあの病院がどうなったかは知らないらしい。いずれ知ることになるが、それは辛い事だと感じる。

雪音は私に笑顔を向ける。その笑顔が逆に心苦しい。雪音は明るい声で言った。

「くろいおねえちゃんがたすけてくれたのっ」



小鳥の囀りが聞こえる。差し込む日差しがボクを覚醒へと導いてゆく。

「んっ…」

寒い。そう言えば、床で寝てしまったのだった。

遠くからシャワーの音。姉が帰ってきたのだろうか。そこまで考え、ボクはようやく目を開く。隣でエンジンが眠っていた。

「あつ、シーフィっ」

思い出し、慌てて振り返る。が、彼女はそこには居なかった。パニックに陥るボク。

階下へ駆け降りる。居間、玄関、その他色々な部屋を回って彼女を探す。だが、見つからない。

姉に見つかる前に、どうなかして彼女を見つけださないといけない！

ボクが家中を駆け回っていると、後ろから声を掛けられた。

「何やってるんだ？お前」

「話し掛けないでくれ、シーフィ。今忙しいんだ」

「?…ふん」

シーフィにそう言って、ボクはシーフィを探しに、もう一度自室に戻ろうとする。

「……」

居間へ向かうシーフィを置いて……て。

居間を見る。そこには姉のパジャマを着たシーフィが、冷蔵庫から勝手にアイスを取り出し、テーブルに座って食べていた。

アイスを美味しそうに食べるシーフィ。今まで見たことの無い笑顔だ。

「…」

それを見て、ボクはしばらく固まっていた。足下で、エンジェがボクを見ていた。



「……で、何で普通に人様の家の風呂に入ってるのさ…」

シーフィの反対側に座り、ボクはそう切り出した。

彼女は依然としてアイスに夢中。こちらの声に気付いてはいない。彼女の幸せそうな顔を見ていると「もういいや」と思ってしまう。

ボクの視線に気付いたシーフィが、ボクとアイスを交互に見た。そして、一言。

「…お前も食べたいのか?」「いるかああっ?!」

シーフィのボケに、いまだかつて無い速度で突っ込みを入れる。彼女は、何故ボクが叫んでいるのか分からない。そんな表情だ。

「…もしかして……」

シーフィが何かに気付いたような表情をした。ようやくボクの言葉の意味を理解したのだろうか。

彼女は真剣な眼差しでボクを見る。

鋭い眼光に、ボクは生唾を呑み込む。

彼女は口を開いた。

「お前……一緒に入りたかったのか？…風呂…」

ガンッ……

ボクはテーブルに突っ伏した。額を強く打ち付けたが、余りに阿呆らしく、痛みをあまり感じなかった。

と言うか、シーフィのこの発言は天然なのだろうか。いや、そうとしか考えられない。

「だが、残念だったな。私はそんなに軽い女ではないぞ」

話を続けているシーフィ。ボクは手をヒラヒラと振り、取り敢えず否定する。

「じゃあ、何だと言うんだ」

本気で分からないのか、彼女は眉間に皺を寄せる。

「いや、普通他人の家の風呂に断り無く入るのはどうかと…」

そう言って、ボクはテーブルの端にあったコップを取り、お茶を注いで口に含んだ。

「お前こそ、女を家に連れ込むのはどうかと思うぞ？」

「ぶっ！」

吹き出した。お茶を。

「なっ！人聞きの悪い事を言わないでくれっ！それに、あれはキミを助けるためじゃないか！」

「別に頼んでないし、お前の家へ連れてけなんて、一言も言っていない」

「……」

いや、確かにそうだけど。ボクは反論出来なかった。

「それに、服が脱がされていたな。：お前、何する気だった？」

シーフィの言葉に、ボクは彼女の白い肌を思い出してしまった。

顔が熱くなる。何かを言おうとするが、上手く言葉に出来ない。

「…ぶっ」

そんなボクを見て、シーフィが吹き出す。笑いは次第に大きくなり、ついには腹を抱えて笑いだした。

「かつ、からかったな！？」

ボクは腰を上げ、前のめりになりながら怒りを顕にするが、シーフィは気にせず笑い続けた。

足下でエンジェがボクの真似をしている。何がしたいんだ、コイツは……

結局。彼女の笑いが収まるまで数分かった。



「……聞かないんだな」

「何を？」

笑いが収まったシーフィはそう言った。

今日は平日だが、この状態では仕方ない。ボクは、彼女の笑いが収まるまでの間に学校に風邪を引いたと電話を掛け、椅子に腰を降ろした所だった。

シーフィの目は打って変わって真剣な物だった。

「見たんだろ？…傷口」

「…」

ボクは無言で頷いた。シーフィは目を伏せる。

「…それなら、何で聞かないんだ…」

先程までの勢いは無く、とても小さな声だ。ボクは静かに、最大限優しく言った。

「話したくないなら、話さなくていいよ」

「え…？」

シーフィが息を呑んだ。ポカんと、間の抜けた顔をしている。

「キミが話したくなったら話せばいい。ボクは…その…」

小っ恥ずかしくて頭を掻く。顔も熱い。でも言いたい。

「信用してるから…キミの事…」

彼女がどういった人物なのかは気になる。だが、シーフィは恩人で、ボクは彼女を信用している。だから、彼女が話したくないなら無理に聞く必要はない。そう思った。

「……とう」

シーフィが何か呟いた。良くは聞き取れなかったが、その後に彼女が見せた笑顔を見たらそれもどうでも良くなった。

「…じゃあ、そろそろ」

シーフィは立ち上がり、帰ろうとした。ボクはそれを止めた。

「ちょっと待って」

玄関まで歩いていたシーフィが振り返る。

「何だ？」

素で気付いていないのだろうか。仕方なくボクは指摘した。

「それ：姉さんのパジャマなんだけど」

服を確認したシーフィが、顔を真っ赤にした。



シーフィを送り出し、ボクは欠伸をしながら時計を見た。

十一時。そろそろ姉が帰ってくる時間帯だ。

「…？」

どういう言い訳をしようか。そう考えていると、妙に頭が痛い事に気付いた。

正確には、気付いてはいたのだが、テーブルにぶつけた所為だろうと思っていたのだ。

体温計で計ってみる事にする。数分後、小気味の良い音が体温計から聞こえた。

「…八度六分」

…どうやら、嘘が誠になってしまったらしい。



空は赤く染まり、時間がそれだけ流れた事を教えてくれた。時計を見れば、針が四時を指していた。

昼頃に姉は一度帰ってきたが、すぐにまた出ていってしまった。相当忙しいようだ。

結果、風邪薬を飲んだ後ずっと眠り、現在に至る。

「……はあ」

溜め息を一つ吐く。暇過ぎる。

だが、一人で居ることを暇だと感じるのは不思議だった。ついこの間までのボクでは有り得ない考えだ。

みゃあっ！

ボクの脇でエンジェが鳴く。まるで、自分が居ると主張しているようだった。

エンジェの頭を撫でてやる。すると嬉しそうに擦り寄ってきた。

その時、インターホンが鳴った。誰かが来たらしい。

ボクはゆっくりと立ち上がり、玄関へ向かった。

そして、扉を開くとそこには。

「こんにちは、聖原君」

「お見舞い来たで」

大方の予想通り、空と学が立っていた。

取り敢えず中へ招き入れる。

自室へ移動し、学校での出来事等を話した。

「そう言えば、神ちゃんはしっとるか？」

二人が来て三十分が経とうとした時、思い出したように学がそう切り出した。

「何を？」

ボクがそう返すと、学がニヤリと笑った。空は呆れたように溜め息を吐く。

「最近、この辺りで話題になっとる事件。知っとるやろ？」

「ああ、あのニュースでやってるヤツ？」

十日前程から起こっている騒ぎ。ニュースでも何回か目にしている。先日姉が現場へ向かっているのをテレビで見ただけだ。

「何でも、建物が原因不明の倒壊をしてるって」

「そうそう、ソレだよソレ」

ピンと人差し指を立てる学。空が学を睨む。

「聖原君、聞き流していいですよ。学はふざけて言ってるだけなんだから」

学が空を無視して続けた。

「あの事件、悪魔の仕業やって噂されとるんや」

「悪魔？」

普通に考えれば、学は阿呆らしい話をしている。小学生でも馬鹿にするような話だ。

でも、ボクはその話に惹き付けられた。何故かは分からない。不思議と興味が湧いたのだ。

「そんでな？全ての事件に共通する事が、一つあるんや」

「何だよ、その共通する事って」

学の口元に笑みが浮かぶ。空は完全にボク等を無視してエンジェと遊んでいた。

「黒装束を着た、金髪の美少女が目撃されとるんや」



「さようなら、聖原君」

「ほな、さいなら」

五時半を過ぎた頃。二人は帰っていった。辺りはすでに暗い。ボクはすぐに自室へ戻った。

「…」

学の話がボクの頭から離れない。気になって仕方ないのだ。

『黒装束を着た、金髪の美少女が目撃されとるんや』

そのフレーズが強く残っていた。そして、ボクが思い浮かべたのは。

「シーファイ…」

別に彼女を疑っているわけでわない。

今朝、ボクは彼女に「話したくなったら話せばいい」と言った。

だが、それなら彼女はいつになったら話してくれる？

矛盾した感情がボクを包む。彼女の意志を尊重したい。だが、知りたい。

そして、彼女が無関係で、彼女の身が安全である事を確認したい。

これも不思議だ。会って間もない相手の身を、どうしてボクは、ここまで心配しているのだろうか。

「姉さんに…相談してみようかな…」

ベッドの上。ボクは窓の外、遙か上空にある薄い雲のかかった月を

眺めていた。



姉が帰ってきたのは夜の九時過ぎだった。ボクは玄関まで迎えに行く。だが、姉は。

「しいゝんやあゝ？ かえつらよおゝ」

異常なまでに酔っ払っていた…

「あの姉さ…」

「しいゝんやあゝっ」

ガバアツと、思い切り抱き締められた。女性とは思えない力。身動きは疎か、呼吸すら上手く出来ない。

初めて知った。姉は酒癖が悪い。

姉の新たな一面を見て、嬉しいのか悲しいのか。ひとまず、渾身の力で姉を突き放す。

「姉さんっ、いい加減…に…って、ええっ?!」

「ううっ…ぐすっ…」

今度は愚図りだした。そして。

「うわああああああんっ!!」

大声で泣きだした。声が響き渡る。ペタンとその場に崩れる姉。

「はあ…」

溜め息が漏れ、体から力が抜けた。



「いやあ、申し訳ない」

あっけらかんとした口調で姉はそう言った。まだ顔は赤い。

「いいけどさあ…」

居間のテーブルに突っ伏して、ボクは呻く。姉は反対側に座り、鼻歌を歌っている。

結局、姉が泣き止むのに一時間かかった。（最後は水をぶっかけた）その所為で、時刻は十時を回っていた。

「神夜、夕飯は食べたのか？」

そう言えば食べていなかった。昼も食欲が無く、軽くしか食べていなかった。

熱も落ち着いていたため、その事を思い出すと、急に空腹がボクを

襲った。

「いや、まだだけど…」

ボクがそう答えると、姉は親指を立て、笑顔でボクを見せた。

いつまでこのテンションは続くのだろうか…

姉は手に持っていたビニール袋から『寿司』と書かれた箱を取り出した。

「アンタはおっさんか……何げに高そうだし…」

と言うか、風邪で寝込んでる弟を一人残して、何故外食に行ける……

「まっ、食いな食いなっ！」

姉は自分の分を取り出す。まだ食うのか…

だが、指摘してまた泣かれても堪らない。渋々、高級寿司に箸をつけた。……うん、美味しい。

姉も寿司を頬張る。本当に機嫌が良さそうだ。ボクは一つ聞いてみる。

「機嫌が良いみたいだけど、どうしたの？」

「ん？」

ボクの問いに、満面の笑みを向ける姉。そして勢い良く立ち上がり、箸を天に向けた。

「何とっ！一週間のお休みを頂いてしまいましたあっ！！」

「…ふん…」

呆然と見つめるボクに、姉はビシィッと箸を突き付ける。

「つまり！神夜との親睦を深める事が出来るのです！！」

サツとボクの後ろに移動する姉。そして、ボクの事を優しく抱き締めた。

「ねえ神夜？明日どこ行きたい？」

明日は土曜日。なら遊びに行くのも良いかもしれない。

……遊ぶ？

「あっ！」

ボクは閃いた。思わず立ち上がってしまい、後ろにいた姉が尻餅をついてしまう。

「どっとうしたの？！」

姉が目を白黒させている。

「ごめん姉さん。明日は無理！」

そう言ってボクは自室へ向かった。まずは体調を整えなければいけない。

居間で姉が駄々を捏ねているのが分かる。ボクは。

「ごめんっ！でも、ありがとうっ！姉さん！！」

それだけを言って、自室に入った。



居間に取り残され、神流は椅子に座り、呆然と神夜の残した寿司を見つめていた。

「……はぁ…」

神流の吐いた溜め息には、悲しみが籠もっていた。

みゃあ

足下でエンジエが鳴いていた。神流はエンジエを抱え、自分の脚のうえに移動させた。

「ほら、食いたいなら食いな？」

エンジエは嬉しそうに寿司のネタを頬張る。神流はエンジエを撫でながら、もう一度溜め息を吐いた。

「…やっぱり『姉さん』……か…」

神夜の駆けていった廊下を見る。寂しいと、その表情が語っていた。

「さあ…夜は長い。…もう一度飲み直すか」

ビニール袋から缶ビールを取り出す。蓋を開け、中身を口に含んだ。



翌朝、体温を計ると熱は下がっていた。でも念の為に薬を飲んでおく。

服装を確認する。私服は少ないので自信はない。ジーパンに厚手の白いTシャツ。その上に黒い革のジャンパーを羽織った。

まあ、特に問題は無いだろう。

財布の中身を確認。八千円弱。おそらくは大丈夫だろう。

あとは、シーフィがいつもの場所に居るかどうかだが。…多分大丈夫だろう。

「…不確定要素、多過ぎるな…」

明日にしようとも思ったが、可能なら最大限早くしたかった。

時計の針は午前十時を指している。いい頃合いだ。

玄関へ向かう。靴紐をしっかりと結ぶ。結んでいると、今更ながら緊張してきた。

「…落ち着け…落ち着け…」

自分に暗示を掛ける。必死にやっていると、背後から。

「何言ってるんだ？」

姉が声を掛けてきた。表情は見えないが、絶対眉間に皺を寄せている。

「いや、ちょっと…」

何も言えない。恥ずかし過ぎる。

「…いってらっしゃい」

小さな声で姉はそう言った。どこか寂しそうな声に、ボクは驚いた。

「私の誘いを断って行くんだから、楽しんでこい。…でないと、怒るぞ？」

その姉の言葉に何かが引っ掛かったが、ボクには分からなかった。

だが、姉の言う通りだ。楽しもう。思う存分。

そう考えると、体から力がすっと抜けたような気がした。

「…ありがとう、姉さん。…行ってきますっ！」

ボクは外へ飛び出した。



雪が固まり、滑りやすくなっている道を、転ばないように走る。

だが、気を付けても何度か転びそうになる。しかし、足が止まる事はなかった。

速く、速く。もっと速く！

そう思いながら走っていた。とにかく、とにかく速く。

しばらくして、いつものビルに辿り着く。階段を駆け上がる。いつも通りだ。

彼女、シーフィの事が知りたいなら、仲良くなればいい。そう思った。

つまり、友達になるのだ。

階段を駆け上がった勢いそのままに、ボクは屋上の扉を開け放った。

いつもの場所に……いた。

今日は傷がない。元気なシーフィだ。

それを見て、ボクはほっと胸を撫で下ろす。

シーフィは振り向いて、ボクを見た。驚いた顔をしている。

そんな彼女に、ボクは少し息を整え、言った。

「遊びに行こうっ！今から！！」
積もった雪が、朝日で輝く。

それは…

楽しい一日を予感させる物のように感じた……

第三章く彼女の謎く（後書き）

えーっと、活動報告に色々書いてあります。気になる方は御覧ください。

第四章～土曜日～（前書き）

WorldChangeより、奏さん登場（笑

第四章　土曜日

「で、どうなの？」

「…どうって？」

空は質問してきた従姉の真依まいにそう返した。

ここは真依の家。空は高校生の真依に、勉強を教えてもらっていた。真依の部屋は女の子らしい物が無く、オカルトグッズが所狭しと並んでいる。

綺麗な栗色の髪が腰まで伸び、スタイルも顔も良く、掛けている眼鏡も、彼女を知的な女性に見せている。

それだけに、この趣味は痛かった…

二人は炬燵に入り、向かい合う形になっている。真依は身を乗り出しながら空に迫った。

「意中の彼に決まってんでしょがっ！」

空は溜め息を吐く。勉強を教えてもらうはずが、いつの間にか恋の話にすり変わっている。

「真依の気にする事じゃないでしょ？」

空がそう言い返すと…

「気にするわよっ！」

「何でよっ！」

こんなやり取りが、かれこれ三十分程続いている。真依は空が受験生である事を完全に無視していた。

ピンポン…

その時、インターホンが鳴った。真依の両親は出掛けているため、真依が応対へ向かう。

しばらくして、部屋へ向かってくる二つの足音が聞こえた。

壁越しに会話が聞こえる。どうやら、真依の友人らしい。

「ただいま」

「お邪魔します」

真依の後ろから、一人の女性が入ってきた。見た感じ、真依と同年ぐらいに見えた。

空や真依と同じく、髪の色は栗色。目は大きく、大人な雰囲気。真依とは対照的に、幼く見える。スタイルも、真依とは逆だった。

「あれ？真依。アンタに妹いたっけ？」

「ああ、紹介するわね。この子は従妹の空」

真依が空を紹介する。空は女性にぺこりと会釈した。

続いて、今度は女性が名乗った。

ふじわら・かなで
「藤原奏です。よろしく」



「へえーっ、空は私達の高校受けるんだ」

「はい」

出会ってから数分、早くも二人は打ち解けていた。

奏と真依は中学からの付き合いらしい。奏は勉強をしている空を見て、しみじみと。

「来年は私達も受験生かあ…」

そう言った。

年が明け、一学期を迎えれば、二人は三年生になる。奏はそれを考え、憂鬱な気分になっていた。

「だから、今のうちに遊びましょ？ 奏」

誘う真依。しかし、奏は即座に断った。

「絶対に嫌。アンタのオカルトにはついていけない」

残念そうな表情を浮かべる真依。その時、何かを思い出した奏は、持っていたビニール袋から何かを取り出した。

「?…クッキーですか？」

空はそれを見て、奏に聞いた。

「うん、私の手作り」

「へえ…」

見事な出来栄えだった。様々な種類のクッキーが、袋の中から出てくる。

「本当に作ってきてくれたんだ」

真依が嬉しそうに一つ摘んだ。

「…まあ、友達のお願いだし…」

優しいというか、人が良いというか。ともかく、いい人だなと空は思った。

「あーっ、何か面白い事起きないかしら」

真依がそんな事を言い出した。空と奏は呆れたように溜め息を吐く。

「それなら、最近起きてる事件を調べれば良いじゃない」

空がそう言うと、真依が手をヒラヒラと振りながら溜め息を吐いた。

「あれは駄目、どう探っても手掛かり無し」

すでに手を出していたようだ。それを見た奏が。

「それじゃあ、私が異世界に飛ばされるとかあったら、アンタは満足するわけ？」

と言うと、真依は馬鹿にしたように笑った。

「奏、それはオカルトじゃあなくてファンタジーよ？」

「あ、そうか」

二人は笑い合う。本当に仲が良さそうだ。

「…はあ」

笑顔の二人を見て、空は溜め息を吐きながら窓の外に視線を移した。

土曜の朝、空には遊びに行きたい想い人がいた。

「…聖原君、何してるかなあ…」

無論その呟きを、真依が聞き逃すわけがなかった。



「…ど、どうだ？」

「…」

シーフィを見て、ボクは震えていた。だが、男なら仕方のない事だと思う。

今のシーフィは、凄く可愛いのだ。

シーフィの了承を受けて、ボク等が最初に向かったのは洋服店だった。

シーフィが「こんな服では嫌だ」と言ったのだ。確かに、彼女の服は汚れている。…一つしか持っていないのだろうか。

何はともあれ、中に入りシーフィは服を探し、試着した。

「…駄目…か？」

否、駄目じゃない。むしろ似合っている。

普段の黒装束とは違い、白を基調とした服装。彼女が着ているのは、薄いピンクのシャツに白のロングパーカ。下はレギンス。

どれを取っても、いつもの彼女とは違い、新鮮だった。

「に、似合ってる…」

顔が熱い。シーフィはとても綺麗なのだ、そんな彼女が着飾ったら直視できない：

「そうか？じゃあ、これにする」

ボクは金額を計算する。

「…」

占めて六千五百円…、これは安く済んだ方なのだろうか：

この辺に疎いボクには判断できない。

しかし、これで予算の大半が吹き飛んだ。何で、たかが服にこんなにかかるんだ：

支払いをしながら、ボクはシーフィを見る。とても嬉しそうに服を見つめていた。

「…ま、いっか」

彼女の表情を見ると、こんな問題は些末な事に感じた。



「ここは何だ？」

建物の入り口を見つめ、シーフィは呟いた。

「映画館…知らないの？」

ボクがそう言うと、彼女は無言で頷いた。視線は映画館から離れない、興味はあるようだ。

しかし、映画館を知らないというのはどういう事だろうか。

…今詮索するのは止めよう。とにかく、今は楽しみたい。

「なあ…」

「ん？…どうしたの？シーフィ」

シーフィは忙しなく辺りを見回している。周囲を気にしているようだった。

「…妙に視線を感じるのだが」

「…なるほど」

ボクも辺りを見回す。すると、見て分かるほどに、街を歩く男の視線がシーフィへ向いていた。

ボクも隣に立つ少女を見る。恥ずかしそうに、薄く頬を染める姿は、例えるならば小さな花のようだった。

少し恥ずかしい、まるで詩のような言い方だが、正しくその通りだった。

まあ、面と向かっては言えないけど…

「気にすることないよ。さ、早く行こう？」

「ん？…ああ」

ボクはシーフィを呼ぶ。彼女は視線を気にしながらも、ボクの後についてきた。

ボクは若干の緊張を感じながら映画館に入った。



二時間後…

「うっ…」

映画館から出てきたシーフィは、瞳に薄らと涙を浮かべていた。

今回見た映画は『子犬のジョンは旅をする』。実話を元にした物語だ。

これを見た女性は、ほぼ間違いなく泣く。そう評判だった。

現にシーフィは泣いている。その評判が正しかった事を表している。

そして、そのシーフィの隣…

「ぐずっ…ううっ、ジョン…何でえっ…」

シーフィを超える…否、これを見た全国の女性を凌ぐ勢いで泣き崩れる神夜の姿があった。

「お、おい…」

凄まじい勢いで、人目を憚らす泣く神夜。シーフィは、入る前とは違う視線を気にしていた。

周囲の人々が、冷めた目でこちらを見ている。中には、感動が冷めた女性も数人いるようだ。

先程よりシーフィの背中に、特に強く刺さる視線。その、女性達の嫌悪の眼差しだろうか。

「な、なあ。取り敢えず離れよう？…な？」

そう言って、神夜を引きずるシーフィ。

その間神夜は、「ジョン」だの「マイク」だの。映画の登場人物の名前を、呼んでは涙を流し、呼んでは流しを繰り返していた…



あれは今世紀最大の感動だ。と、ボクはそう思う。

あの映画を見て泣かない奴は、絶対に人ではない。断言できる。

でも、何故だろうか。さっきからシーフィの視線が冷たい。

映画が気に入らなかったのだろうか。…それは有り得ない。確信は

ないけど。

まあ、何はともあれ、今後あのような映画はやめておこう。

「さあ…どうしようか」

今、ボクは焦っていた。

手が震えている。そして、その手には財布。

残金…五十円。

「ヤバイ…」

ボクの背中を、冷や汗が伝う。最初の服が誤算だった。今更考えても仕方はないのだが。

時間を確認。

十一時半…、食事時だ。

比喻ではなく、本当に頭を抱える。隣でボクを見るシーフィ。その顔にはこう書いてあった。

『腹が減った』…と。

財布の中身を確認。無論、増えているはずが無い。

天を仰ぐ。途方に暮れていた。

「…！」

その時、聞き覚えのある声が耳に入った。

無意識のうちに、ボクは声の方へ走りだした。

人波の中に見えた人物。間違いないっ！

「空っ！？」

「ひ、聖原君?!」

空だった。突然声を掛けられて驚いたのだろう。空は顔を赤くしていた。

「あれ？空。誰、その子」

姉…だろうか。隣にいた女性が空に尋ねた。

二人とも暖かそうな格好。工夫を凝らしたファッションだ。…ボクの脳裏に嫌な思い出が蘇る。

「聖原…神夜君…」

空にしては珍しく、ボクをフルネームで呼んだ。すると、隣の女性は。

「ふーん、この子が…」

値踏みをするようにボクを見る。そして頷き、何かを呟いた。口の動きは、「ごうかく」だった。

「合格」？一体何が「合格」なのだろう。

「えっと、こっちは真依。私の従姉なの…」

一通り紹介を終え、ボクは空に向き直った。何故か、空は顔を赤くする。

「…お金、貸してください…」

ボクは深々と頭を下げた。きっと、空と真依さんは目を丸くしているだろう。

「…えっと？」

何か言い訳をしなければ…、だが、シーフィの名を出すわけにはいかない。

「その…、姉さんと遊びに来たんだけど、財布落として…」

咄嗟に出た嘘。ボクの心臓は凄い速度で脈打っている。

長い沈黙の後、空が口を開いた。

「いいよ、いくら入るの？」

ボクは顔を上げ、空を見た。空の顔には、優しい微笑みが浮かんで

いた。

「えっと、二千円ぐらいあれば…」

「はい」

ボクが言うと、サッと千円札を二枚差し出す空。

今更ながら、良心がボクを責める。

「…本当にいいの？」

そう尋ねると、空はゆっくりと頷く。

「私達、友達でしょ？」

彼女の言葉を聞き、頬が緩むのを感じた。『友達』…、とても嬉しい言葉だった。

ボクは空に礼を言い、その場を後にした。

いつか、本当の事を言って謝ろう。そう思った。



「いいの？ついていなくて」
神夜の後ろ姿を見ながら、真依はそう言った。空は笑顔を崩さず頷いた。

「姉弟水入らずを、邪魔は出来ないからね」

そう言って空は小さく笑う。その様子を見て、真依はわざとらしく溜め息を吐いた。

「はぁ…、そこはグイグイと行って、お姉さん公認にでもなっちゃいなさいよ」

「ばっ、馬鹿じゃないのっ?！」

空の顔が赤くなる。実に分かりやすい。

真依は加えて何かを言おうとしたが、そこへ奏が現われた。

「ごめん、待った?」

結局三人で遊ぶことになり、奏は家に取りに行く物があった。

「……………、っもう!遅いわよっ、奏!」

「…何?今の間」

空を弄れなかった。その悔しさを隠して笑顔を作ったが、バレた。

「ん?何でも無いわよ?」

「え?ちょっと!凄い気になるっ!」

「ふ、二人ともっ!早く行こう!」

そんなこんなで、三人は街へ繰り出した。



「…一体どうしたんだ？アイツは…」

天を見上げて呆然としてたかと思えば、今度は凄まじい勢いで駆けていってしまった。

結果、私一人が残される羽目になっている。

「…はあ」

どうしようも無いので、近くのベンチに腰掛ける。

そして、道を歩く人や、車道を走る車を眺める。

世界は変わるものだ。

想像の出来ない変化を遂げている。それは、悲しいのか、嬉しいのか。私の場合は前者だろう。

今を生きる人々は、おそらく大半が後者だ。進化、そして発展を喜び、享受する。

だが、私は違う。

時の流れは残酷だ。時が経つにつれ、知っている景色が変わっていく。

ここは日本という国だったか。言語に関しては、口から考えている事が言葉になるので心配はいらないが。
私が気にしているのはそんな事ではない。

過去、私が訪れたのは海の向こうだっただろうか。
きっと、そこも変わっているだろう。私の知らない形に…

「はあ…」

口を開けば溜め息ばかり。行きたかった。海の向こうへ。

だが、私はここに留まっている。

そう、神夜だ…

私は神夜に…

「よお、そこのお嬢さん？」

その時、汚い声の上から降ってきた。



「うわっ、ヤバイ！」

ボクが戻った時、シーフィは三人の不良に絡まれていた。

少しだが、会話が聞こえる。どうやら、シーフィをナンパしているらしい。

うん、綺麗だからね。

「って！そうじゃないっ」

ボクは何で不良に賛同してるんだ！

ボクが自問自答しているうちに、一人の不良が、彼女の肩に手を置こうとした。

バチンッ：

その手を、シーフィが払った。

そして、不良に何か言った。これは、はっきりと聞き取れた。

「気安く触れるな、ゲス共」

彼女のその言葉に、不良達は怒りに顔を歪め、襲い掛かった。

ボクは駆け出す。彼女を助けなければ：

だが、ボクが行くまでもなかった。

ガスッ、ゴスッ、バキッ！

それは一瞬。

三人の不良は、その場に泡を吹いて倒れた。

道を歩いていた人、そして勿論ボクも、目を丸くしてシーフィを見た。

「何だ、戻ってたのか」

パンパンと、手を叩きながら、彼女はボクに気付き、声を掛けてきた。

「あ、うん、…あ、あははっ…」

しばらくの間、ボクは何も言えなかった…



一人しかいない家の中。音は、テレビから流れる物のみ。

「…ふいっ」

神流は昼間から酒を飲んでいた。半ば自棄酒だ。

「ん…」

ビールが切れた。面倒臭そうに立ち上がり、冷蔵庫へ足を運ぶ。

…無かった。

「…」

神流が冷蔵庫の扉を力一杯に閉じる。その時、インターホンが鳴った。

「神流さーんっ……居ますかぁー？」

この声は雨宮だ。神流は玄関へ行き、一言。

「居ない、帰れ」

「あっ、そうっすか……、ってえええっ！居るじゃないっすかあっっ?!」

勢い良く扉を開き、雨宮がそう抗議した。手にはビニール袋を持っている。

神流は耳を押さえながら。

「私が居ないと言ったら居ない。だから帰れ」

「暇してると思って、わざわざ来た後輩にそんな事言いますか？普通…」

雨宮の中で、神流が暇なのは決定事項らしい。神流の額に青筋が浮かぶ。

「何で暇だと決め付けるんだ。弟と出掛けているかもしれないだろ」

神流のその言葉に、雨宮は胸を張り、大口を開けて笑いながら言った。

「いやあ、神流さんきつと振られてると思っ……ぶぺらっ?!」

神流の振りかぶった渾身の一撃が、雨宮の顔面に『めり込む』。そして、1メートル程飛んだ。彼のいた場所には、彼の持っていたビール袋だけが残っていた。



「…んで、暇してたんでしょう?」

「…」

神流は、雨宮が持ってきた缶ビールを飲みながら彼を睨む。雨宮は、「ひいいっ」と言いながら後退さる。

「…暇でも、お前と居るよりマシだ」

「うわっ、ひどっ!」

そう言ったところで、雨宮の表情が真面目な物に変わる。

「ところで、神流さん…」

「何だ? 仕事の話なら聞かないぞ?」

大切な休暇が侵されると感じた神流は、先に釘を刺す。だが、雨宮

は首を横に振った。

「いいえ、仕事の事じゃないです」

「？」

神流が首を傾げ、ビールを口に含む。雨宮が一度息を吐く。そして、キッと眼差しを強くし、ゆっくりと口を開いた。

「弟くんには、告白したんですか？」

「ぶふうっ?!」

神流が盛大に吹き出した。ビールが噴水のようになる。

「阿呆かお前はあっ?!」

神流がビンタをかます。いつもなら吹き飛ぶはずだが、何故か雨宮はにやけたまま。

「構わないじゃないですか。弟といっても、義理なんでしょう？」

神流は呆れたように肩を竦める。

「前も言ったけど、分からないんだよ。両親は亡くなったし、戸籍を調べても駄目だった」

神流の言葉を聞き、雨宮は嫌らしい笑みを浮かべた。

「弟くんが好きなのは、否定しないんですね？」

「…」

ガスッ：

神流の拳が、正確に雨宮の顎を捉えた。

雨宮は失神した。



「いらっしゃいませ〜」

ファミレスに入り、店員の掛け声を聞く。

ボク等は席につき、メニューを開いた。

「シーフィは何が食べたい？」

「…」

ボクの質問に、無言でメニューを指差すシーフィ。ボクは彼女の持っているメニューを覗き込んだ。

『デラックスパフェ』

八百五十円

いや、それデザートですから、シーフィさん。

だが、彼女は瞳を輝かせ、その大きなパフェの写真から視線を外そうとしない。

「……すみませーんっ」

ボクが呼ぶと、店員がすぐにやってきた。

「デラックスパフェと……、コーヒーを……」

「かしこまりました」

注文を聞いた店員は、去っていった。シーフィがボクを見る。

「何も食べないのか？」

「あ…うん、ははっ…」

コーヒー百五十円、合計で千円。出費は最低限にしくはないけな
い。

「実は、あまりお腹空いてないんだ」

取り敢えず、そう強がっておく。シーフィは訝しむが、彼女の思考はすぐにパフェへ向かってしまった。

注文してから二分程で貧乏揺すりを始めた。

「そんなに楽しみ？」

「当たり前だろうっ!!」

ボクの問いに、間を置かずに答えるシーフィ。満面の笑みだ。

何というか、今日一緒に行動していて、シーフィの印象が変わった気がする。

「…何だ、その意外そうな顔は…」

表情に出ていたらしい。

「いや、その…」

どうしようか、上手い言葉が見つからない。

とにかく、会話を繋げなければ…

「甘いものとか…好きなの？」

こくりと頷くシーフィ。

そういえば昨日、勝手にアイスを食べ、幸せそうな顔をしていた気が…

「私が甘いものを好きなのは変か？」

「いやいやっ! そうじゃないって!」

ジェスチャーを交えて、必死に否定をする。そうやっている間に、言葉を整理する。

「初めてあった時、もっと気難しい人かと思ったから…」

ボクの言葉に、シーフィは目を伏せる。

「…そんな奴に、よくもまあ会いに来たな」

彼女の声は寂しげだった。会いに行った理由を素直に話した方がいいだろうか。

「…でも」

ボクの切り返しに、彼女は驚き、目を見開いた。思ったより、声が大きくなってしまった。

だが、彼女の意識がこちらに向いたなら、今が良い機会だ。

「安心…したんだ」

「え…」

ボクの言葉に、彼女は再び表情を変えた。

ボクは続ける。

「それに、シーフィを見た時、絶対に会わなきゃいけない。そう思

ったんだ。…何では分からないけど…」

沈黙。

遠くに親子連れの笑い声、部活休みの学生の会話、メニューを読み上げる店員の声。

「……ぷっ」

突然シーフィが吹き出した。そして、それは次第に大きな笑い声になっていく。

「本当に、お前は変な奴だ」

涙を拭いながらシーフィは言った。彼女の言葉に、ボクも思わず笑う。

「それをキミが言う？」

「確かにっ」

先程と空気が変わった。沈んでいた空気から、浮き上がるような空気に。

ボクの顔に、そしてシーフィの顔にも、満面の笑顔。

「やっぱり…」

無意識だった。

気付かぬうちに、ボクは口を開いていた。

「シーフィは…笑ってた方が似合うし、可愛いよ」

はっきりと、彼女が息を呑む音が聞こえた。

……あれ？…ボクは今、何て言った？

頭の中で、自分の言った言葉を反芻する。

ななななっ?!何を言ってるんだボクはあっ!!

顔が熱い、きつと真っ赤だ。

「あのっ、そのっ、今のは…」

顔の前で手を振りながら、言葉を探す。

「…あれ？」

その時、また彼女の様子が変わった。俯き、何かを呟いている。だが、それは悲しむというより、懐かしんでいるようだった。

「…シーフィ？」

「……え？あ、ああ…」

ボクの声に、シーフィはようやく顔を上げた。そして、ボクの顔を見て。

「ああ、すまない。少し考え事をしてしまった」

ふっと、頬笑んだ。さっきとはまた違う、優しい笑顔。

せっかく冷めた顔が、また熱くなる。

「…どうした？ 顔が赤いぞ？」

シーフィは小首を傾げる。

「い、いや…何でもない」

ボクはシーフィから視線を外す。

「お待たせしました。デラックスパフェとコーヒーです」

タイミング良く店員が現われる。ボクは救われたような気持ちだった。

「ごゆっくりどうぞ」

店員が去って行く。しかし、もう心配する事はない。ボクはシーフィを見る。

予想通り、彼女の目は、パフェに釘づけだ。

ボクはコーヒーを一口啜る。程よい温度のコーヒーは、ボクの心を落ち着かせた。

シーフィは、一口目を口に運んだところだった。

…幸せそうな顔だ。

「お前も食べるか？」

ボクの視線に気付き、シーフィがそう言った。ボクは当然のように、首を横に振る。

「いいよ、ボクはお腹はへっ…」

ぐうぐうっ…

『減ってない』と言おうとした時、腹が鳴った。実に大きな音だ。今度は羞恥心から顔が熱くなる。

時刻を確認。

十二時半、腹が減らないわけがない。

「…ほら」

シーフィがスプーンでクリームをすくい、ボクへ突き出した。

「……違うスプーンでお願い」

空腹に屈し、彼女と一緒にパフェを食べる事になった。

恥ずかしくて、味は分からなかった……



「…騒がしい」

シーフィがしかめっ面でそう言った。でも仕方なかった。どこへ行けば良いか分からなかった。

「…ごめん」

言葉が見つからず、ボクは頭を垂れた。

「で、ここは何なんだ？」

周囲を見回すシーフィ。騒がしいと言いながらも、初めて見る物に興味があるらしい。

少しほっとした。

「ああ、ここは…」

画面に向かい、コントローラを操作する男性。太鼓を叩く青年。クレーンを操作し、景品を狙う少年。

そう、ここはゲームセンター。

友達を作らなかったボクが、たまに来ていた場所だ。

「ゲーム…センター？」

これも初めて聞く言葉なのだろう。響きを確認するように、彼女は口にした。

「ん…、例えば…」

ボクは、丁度空いた太鼓のゲームに百円玉を入れる。すると、特殊な語尾のキャラクターが現われる。

「シーフィもやる？」

こくりと頷くシーフィ。ボクは百円玉をもう一枚入れる。キャラクターが二体になった。

「はい、これ」

専用のばちを渡す。彼女はそれを両手に持ち、じっと睨み付けた。

「ほら、始まるよ？」

「えっ？あ、うっ！」

曲に合わせて球体が流れる。小気味よくコンボを重ねるボクに対し、シーフィはワントテンポ遅れて叩く。

結果は言うまでもない。

「だぁーっ?！」

ガツン、シーフィがばちを叩きつける。客の一部が何事かと、ボク等の方を見た。

「だ、大丈夫! もう一回出来るからっ!」

「もういいっ!」

憤慨し、シーフィはゲームセンターを出ようとする。ボクは彼女を呼び止め、謝った。

「…お前は何をしたかったんだ…」

「すみません…、焦るシーフィを見て、楽しんできました…」

シーフィは腕を組み、足を小刻みに揺らしている。…ああ…、怒ってる…

「はぁ…」

一つ、シーフィは溜め息を吐いた。彼女の空気が、多少和らいだ。

「今回は許すが…、今後は絶対にするな」

強く、そう言われた。

「う、うん…」

ボクは小さく頷くしか出来なかった。ボクが頷くのを見て、彼女の

表情が変わった。…優しい笑顔。

不似合いな空間に咲く一輪の花のように、その笑顔は優しく、力強く、そして……儚く見えた。

彼女を、泣かせてはいけない。彼女には、笑っていて欲しい。

何故かは分からないが、その笑顔を見た瞬間、ボクはそう思った。

「次は、何だ？」

彼女の口から紡ぎだされる言葉。それは鈴の音を聞いているような、鮮やかな音だった。

「あっちに行こうっ！シーフィっ！」

「あ、おいっ！ちょっと待てっ?!」

ボクは無意識に、彼女の白い綺麗な手を引く。彼女が手を握り返すのを感じながら、次のゲームへ向かった。



「ってて…」

「お、起きたか？」

神流の強打を受け、倒れた雨宮が起きた時、すでに日は沈みかけ、空は茜色に染まっていた。

起き上がり、テーブルを見た雨宮が絶叫する。

「あああっ?! 僕の分も食べたんですかあっ?!」

雨宮の持ってきたビニール袋。その中に入っていたコンビニ弁当（二人分）が空になっていた。

「何で食べるんですかあ?!」

あれは楽しみにしていた焼き鮭弁当だ。当然、雨宮は抗議する。

「ん? 鮭を食ってるのは私じゃない。…ほれ」

神流が足元を指差す。雨宮が下に視線を向けると、そこにはエンジエがいた。

みゃあっ!

あゝ、美味そうだなあ、焼き鮭…。そう雨宮は思う。

白い子猫が、自身の食料を食す。その愛らしい姿に、雨宮は一瞬和む。が…

「つてえ! 返せえ?!」

ゴスツ…

エンジエの首根っこを掴もうとした瞬間、神流の蹴が雨宮の鼻っ柱を捉える。

「っんのおおおっ?!」

痛みにもんどりうつ雨宮。数秒藻掻いた後、再び神流に抗議した。

「何で蹴るんですかぁ!」

「…それ、弟の猫だから」

短く、単純な理由を、神流は答える。

「はぁゝん…」

ニヤリ、雨宮の口元に嫌らしい笑みが浮かぶ。もうこの際、先輩後輩は関係ない。

「つまり、愛しの弟のために、その猫を守ったと…」

自分が気絶した理由も忘れ、雨宮は言った。

神流は寸での所で拳を押さえた。また気絶され、夜まで居られては困る。そう考えたのだろう。

神流は溜め息を一つ吐き、訂正を入れる事にした。

「一つ、言っておく。別に、お前の思っている様な感情を、私は感じていない」

神流の言葉を聞き、雨宮が残念そうな顔をする。

「えー…、じゃあ、何なんすか一体」

そう聞かれ、神流も一瞬悩む。そしてポツリと。

「…使命感って奴かな」

そう呟いた。

「?…何ですか?それ」

「これ以上は、説明する義理はない」

食い下がろうとする雨宮を、神流がバツサリと切り捨てる。

「うへえ…」

椅子に腰掛け、雨宮は顔を伏せた。

神流はぼんやりと、テレビから流れる夕方のニュースを見る。

内容は、例の事件だった。



ゲームセンターを出た時、日は西へ傾いていた。

「…はあ」

疲れた。それが素直な感想だ。金が底をついたのだ。

「中々良かったな」

そう言って、シーフィは笑う。それを見て、少しだけ気力が回復する。

「あとは…何か話ながら歩こうか」

「いいぞ、別に」

了承を得、ボク等は並んで歩きだした。

コンクリートの上に積もる雪。それを踏み締めながら歩く。

他愛のない話をした。

ボクの話に、彼女は熱心に聞き入る。そして、笑顔を見せてくれた。…少しは心を開いてくれたのだろうか。

三十分程歩き、不意に、彼女が足を止めた。

「…シーフィ？」

不思議に思い、ボクは声を掛けた。

シーフィは震えていた。顔は青白く、瞳はただ一点を見据えていた。

彼女の視線を追う。

「……教会？」

そこには教会があった。その神聖な雰囲気、離れたこの場にも伝わる。

「ううっ…」

シーフィは小さく呻き、自身の左腕を強く掴んだ。唇を噛み、皮が破れ、血が滲む。

「シーフィ？ 大丈夫…」

バシンッ…

彼女の震える肩に手を伸ばした。が、彼女はその手を振り払った。

「っ！」

「シーフィッ！！」

突如、彼女は走りだした。ボクはそれを追う。

彼女は足が速かった。ボクは必死に、全力で追った。

「シーフィ！ シーフィッ！！」

心臓が張り裂けそうだ。

それでも、彼女が視界から消えないように走る。

「シーフィィィッ！！！」

そう、名を叫びながら。転びそうになりながら。ただただ必死に、走った。

彼女は止まった。そこは暗い路地裏、行き止まりだったのだ。

「シー…ファイ…」

息を切らしながら、ボクは彼女を呼んだ。そして、一歩、また一歩と、歩を進めた。

「来るなあっ!!」

彼女が叫んだ。聞いたことのない、彼女の悲鳴だった。

泣いている。シーファイは泣いている……

ボクが近付く事で彼女が泣くのなら、歩みを止めれば良いのではないか。

だが、ボクの足は止まらない。

「見るなあ…、見ないでくれえっ!!」

次第に。

闇に目が慣れてくる。

ボクの脳裏に、学の言葉が蘇った…

『悪魔の仕業らしいで…』



「…」

神流は雪音の言葉を思い出していた。

「『たすけてくれた』…」

じっと、目を細めて、ニュースを見る。

そして、口を開く。

「『黒装束の…』」



「金髪的美少女…」

神夜の口から、声が漏れる。シーフィに届いているかは分からない。

彼女はまだ泣いている。泣いて、神夜を睨んでいた。

見るな。その瞳はそう訴えていた。

怒りではない、懇願だ。

「…」

神夜は無言で彼女を見る。

今はもう、闇に目が慣れ、鮮明にシーフィを捉える事が出来る。

だが、そのシーフィは、神夜の知るシーフィではなかった。

醜く、巨大な左腕。潰れ、中から赤い光のみを発する左目。左耳は獣の様に変わり果てていた。そして。

背中からは黒き片翼。

美しく可憐な少女、シーフィは：

暗き闇の中……

悪魔へと、姿を変えていた……

第五章↳運命交差↳(前書き)

遅くなり、申し訳ありません m

〔 m

第五章　運命交差

ボクが居たのは、例えるなら暗い、光の差し込まない部屋だった。

誰も入れない。ボクの方からも、決して出ようとはしない。

ボクはそれで幸せだったのか？

否。

そんな筈はない。

苦しかった。悲しかった。辛かった。痛かった…

一人の部屋は、心が冷えた。

でも。

ボクにはどうすればいいのか分からなかった。

勇気が無かったから。

どうしようもなく、心が弱かったから。

誰の言葉も、ボクは信じる事が出来なかった。

勇気が、無かったから…

でも、何故だろうか。

不思議と、彼女の事は信じる事が出来た。

彼女は易々と、この暗い部屋の扉を開いた。

部屋に光が差し込む。

彼女は、眩しかった。

どこまでも綺麗で：

ボクは彼女が：

女神に見えた。



『…あれ程、事を大きくすると言っただろう』

薄暗い部屋の中、若い男の声が響いた。

腰まで伸びた美しい銀髪。すらりとした体軀を、独特な服に包んだ男は、その整った顔の眉間に皺を寄せている。

開いているのか閉じているのか分からないが、開けば相手を萎縮させるであろう瞳。口元は歪み、己の部下に対する怒りを顕にしていた。

『…何か言い分はあるか？』

男の冷たい言葉を浴びた部下は、肩を震わせ、男を見た。

黒く、爛れた肌。長く鋭利な爪。巨大な牙。背に生えた黒き翼。潰れたような赤き瞳…

悪魔、あるいは魔物と形容できる生き物。

しかしその生き物は、一人の男に怯えていた。

『イツ、イマ一度ワタクシメニ…』

『…消えろ』

部下の懇願を最後まで聞くことはなく、男はその細い腕を部下へと向けた。

一瞬で、悪魔はその場から蒸発した。

『無能な者など、我が配下には要らぬ』

男が鼻を鳴らし、先程まで部下の居た場所を睨む。

その時、部屋の扉が叩かれた。

『…どうした』

『報告があります』

扉から、別の部下が入ってくる。

先程の部下とは違い、人の形をしている。だが、背には黒い翼が生えていた。

『…申してみろ』

『標的は移動せず、依然としてあの街に留まっております』

『…何？』

男は耳を疑った。それは幸運な事ではある。しかし、理由が分からない。

動かない理由。あの街には何かがある。男はそう考えた。

『如何致しましょう。ディネオ様…』

ディネオと呼ばれた男は、数秒の思考の後、言葉を発した。

『厄介な者共が動きだす前に片を付ける。…私が出向こう』

口元に笑みを浮かべる。部下は了解の意を表し、恭しく礼をする。

『状況に応じ、随時指示を出そう。私の指示があるまで動かぬよう伝えておけ』

『はっ!』

部下は退出する。ディネオは懷から写真を一枚取り出す。そのに写る少女を見、憂いの籠もった表情を浮かべ、小さく溜め息を吐いた。そして、再び懷にしまい、ディネオは部屋を後にした。



「シーフィ…」

日曜日、ボクはいつものビルを訪れていた。

日は高く昇り、ボクを照らす。雪に反射し、光り輝く。

左脇に視線を落とす。

シーフィがいつも座っていた場所だ。だが、今は誰も居ない。ボク一人が、この場所で立ち尽くしている。

「…くそっ!」

苛立ちをコンクリートの地面にぶつける。固くなった雪を削る音。

ここに来ればシーフィが居るかもしれない。僅かな期待は、脆くも崩れ去ったのだ。

「…シーフィ、一体どこに…」

そう声を漏らし、ボクは空を見上げる。晴れ渡った空は、ボクの心とは真逆だ。

ボクは、昨日の出来事を思い出した…



『来るなあっ!』

ボクの記憶にある彼女の最後の表情は……泣き顔。

ボクの足は、無意識のうちに彼女へと向かっていた。彼女に笑って欲しい。その一心だったのだろうか。

『ああああアア!』

それは逆効果だった。彼女は半狂乱になり、肥大化した左腕で、強く、地面を叩いた。

凄まじい轟音。ボクの一步前が陥没した。

『アッ、アアッ!!!』

彼女は右腕で頭を抱え込み、蹲った。

ボクは言葉を探した。最大限、彼女を安心させられる言葉を。

思いついた言葉は、単純。

これしか思いつかなかった。

ボクは、出来る限りの笑みを浮かべ、言った。

『大丈夫、怖くない。…ボクは絶対に、キミを嫌いにならない。…決して』

彼女の様子が変わる。目を見開き、ボクを見た。

綺麗な金髪は乱れ、どこかみすばらしい印象を受ける。

呼吸が安定した。ボクは彼女に近づこうと、足を一步、陥没した場所へと踏み出した。

その時。

『来るな』

先程の泣き声とは違い、小さな制止の言葉。それは、小さな声だが、不思議とよく通った。

『シーファイ…』

ボクは立ち止まり、ただ呆然と彼女を見た。

彼女はボクが止まったのを確認し、ゆっくりと立ち上がった。

そして自身の左腕を見る。すると、急速に腕は小さくなり、元の大
きさへ戻った。瞳も同じく、普段の綺麗な瞳へ戻る。

『見ただろう。私は人じゃない…』

『…』

彼女の発した冷たい声に、ボクは何も返せない。無言で彼女の言葉を
聞いていた。

『…これ以上、私に関わらない方が身のためだ』

『…シーフィっ!』

思わず叫んだ。後に続く言葉などない。それでも、叫ばずにはいら
れなかった。

『……』

『……』

互いに何も言わない。沈黙が続く。

静けさの中、人の足音が近付いてくるのが分かった。あれ程の音だ。
気付かない方が不自然だ。

『人が来た…な』

彼女は足音を確認し、そう言った。表情は冷たい、感情を殺していた。

『…シーファイ』

名前を呟くだけで、足が前に出ない。ボクは自分の足を見、そして気付いた。

震えていた。小刻みに、ただガクガクと。

怯えていた。ボクの心ではない。ボクの身体が怯えていたんだ。

『お前も、早くこの場を離れるんだ。色々面倒だろう…』

そう言いながら、服についた汚れを払う。感情を押し殺した声。彼女はボクを見た。

あんな事を言いながら、震えを抑えることの出来ないボク。彼女にはどう見ているのだろうか。

一度、彼女は俯く。そして、顔を上げた時。

『…楽しかった、ありがとう』

優しい笑顔を浮かべ、彼女は泣いていた。先程まで溜めた涙を、一度に流すかのように…

『……………さようなら』

彼女は高く跳躍する。ビルを越え、すぐに姿が見えなくなってしまった。

『シーファイ！…シーファイイイツツ！！』

叫んだ。彼女の名を。

天には三日月。

その形は、ボクを嘲笑っているように見えた。



「…い、…聞いとるんか？神ちゃん」

「えっ、ああ…何だっけ」

ボクの返事に、肩を竦め、小さく溜め息を吐く学。

日付変わって月曜日。昨日、ボクは一日かけてシーファイを探した。しかし、結局彼女は見つからず、現在に至る。

シーファイの事で頭が一杯になり、学の話に集中出来ていなかった。

昼休み、いつもの面子で廊下で立ち話をしている。

最初は空と学で話をしていたので、ボクは外を眺めていた。

「高校はどうするのかって、そう話してたの」

空がボクを見てそう言った。

「高校…」

よくよく考えてみれば、ボク等は中三だ。しかも十二月上旬。それなのに、ボクは行きたい高校がはっきりしていない。

担任にも、願書がどうか言われていた気がする。

「考えてなかったな…」

だが、今の状態では考えようにも考えることが出来ない。シーフィの事でそれどころではない。

特に希望校もない。学力が丁度の学校に入れればいいか……

「ねえ、聖原君……」

空が遠慮がちに口を開く。ボクは耳を傾ける。一体何だろうか。

「桜花高校…、受けてみない？」

「…桜花高校って、私立の？」

私立桜花高校。この街にある有名な学校だ。私立だが、進学率の高さ、部活動等から、人気が高い。

「どうして？」

ボクが聞くと、空は顔を赤くしながら説明を始める。

「その…、せっかく仲良くなったから、出来れば一緒の学校に行きたいなって…」

そう言われたら考えなくてはいけない。

確かに、仲良くなった友達と一緒にの学校には行きたい。だが、私立になると学費が高い。姉に今まで迷惑を掛けた分、これ以上は…

「行くには行きたいけど、学費が…」

「あゝ、学費ならな…」

断りを入れようと思い、そう言った時、学がボクの言葉を遮った。

「入試テストの得点上位者には、ある程度免除されるんよ。神ちゃん、成績は悪くないやろ？」

「ん……」

桜花の人気を考えると、それはかなりの競争率だ。目指すならば、相当の努力が必要になるだろう。

「…、そういう学は？」

学はどこを受けるのだろうか。そう思い、聞いてみた。学は口元に笑みを浮かべ、当たり前のように言った。

「俺も桜花や。一人暮らしやし、学費の問題も…」

「ちょっと待て」

今度はボクが学の言葉を遮った。軽く問題発言をしたぞ、コイツ。

「一人暮らしって言ったか？今…」

「話して無かったか？」

「ないよっ!!」

自分でも驚くほどの速度で、ボクは突っ込みを入れる。学はあっけらかんとした顔で。

「…まあ、家出みたいな物やし、あんまし気にすること無いて」

そう言ったが。

普通この歳で一人暮らしなんかするか？いや、それ以前に出来るのか？

そんな事が、頭の中で渦巻いていた。

「まあ、あんまり遠くの学校にも行けへんしな…」

「え…」

ふと、学が小さな声で呟く。その時の顔は、何だか悲しそうだった。

だがそれも一瞬、すぐにいつもの笑顔に戻った。

ボクの気のせいだったのだろうか。

「空はいくら頑張っても無理やしな〜」

空白の時間のうちに、学はあっさりと話題を変えた。

「う、うっさいっ!!」

突然話を振られ、しかも馬鹿にされた空は、顔を真っ赤にして怒る。

そのせいで、学から話を聞くタイミングを逃してしまった。いつか、話してくれるだろうか。

「私関係ないもん!」

「∴関係ない?」

次いで、空の言葉も引っ掛かった。ボクが眉間に皺を寄せていると、学がニヤニヤしながら言った。

「神ちゃん。空の名字は?」

「∴桜花。……………って、もしかして…」

ボクが視線を向けると、空は頷いた。

「うん、私のお爺ちゃんの学校なの」

何だろうか。今日は色々と驚かされる。

「…で、神ちゃんはどうするんや？」

ここで、学が話を戻す。

ボクは少し考え、答える。

「…一応、努力してみるよ。上手くいったら、県立より安いみたいだし…」

ボクがそう言うと、二人は顔を見合わせ、笑みを浮かべる。

そして、凄まじい勢いで抱きついてきた……



放課後、ボクは街をふらついた。もしかしたら、シーフィに会えるかもしれない。そんな僅かな希望を捨てずに。

「…」

すでにこの街を離れているかもしれない。いや、そう考えた方が自然だ。

「シーフィ…」

彼女の名を呟く。だがそれは、意味もなく雑踏の中に掻き消えていった。

空を見上げる。

夕暮れの空は、赤い日に染まり、どこか寂しい。

歩き回るうちに、彼女と別れた場所の付近まで来た。立ち入り禁止と書かれたテープが貼られ、数人の警察がいた。

規模は小さいが、最近の事件と関係があるであろう場所だ。以前の事件程ではないが、警備、報道陣が見えた。

「…あ」

その中、見覚えのある後ろ姿が見えた。

「……あ」

その人物もボクに気付き、同じように声を上げた。そして、こちらに寄ってきた。

「こんな所で何してるんだ？」

人物…姉は、ボクの前に立ち、そう聞いてきた。

「学校の帰りだよ」

適当にそう返し、すぐに不味いと感じた。そうだ、ここは…

「帰りって、家から逆方向だろ、こっち」

「う……」

やはり突っ込まれた。ボクは小さく呻き、苦笑いをして誤魔化そうとするが、咄嗟に言い訳が思い浮かばない。

「えっと、その…」

「…」

しどろもどろになっているボクを、姉は訝しげに見る。

「…神夜、ここに何か用事があるのか？」

姉は感じが良い方だ。今も、ボクを見てこう言った。

…こんな状態だと、疑われても仕方ないか？

「…いや、特には」

なるべく平静を装う。しかし、姉がその程度で諦めるわけが無い。そして、ボクを追求しようと、姉が口を開いた時だった。

「あ、いた！神流さん！」

スポーツ刈りの男が駆け寄ってきた。

「急に居なくならないで下さいよ」

「特に問題ないだろ？雨宮が適当に取材すればどうにかなるだろ」

姉がさらりと問題発言。仕事に対して、そんな態度で良いのだろうか

か。

「休暇が無くなったからって、そんな適当な事言わないで下さい…」

雨宮と呼ばれた男は肩を落とす。

姉は久し振りに休暇を貰った。だが、この事件が発生し、駆け出された。

「こんな小さな事件。新人でも十分だろうが…」

姉は不満を吐露する。

「絶対、休み増やしてやる…」

姉の顔からは決意、そして、身の毛もよだつような怒りが見えた。

「はあ…、…ん？」

雨宮がボクに気付いた。そしてマジマジとボクを見、嫌らしい笑みを浮かべた。

「弟くんですよね？」

「?…そうですけど」

雨宮は姉に何かを耳打ちする。

ガンッ、ズザザーッ！

姉が雨宮を殴った。

……人って、あんなに飛ぶんだ…

「ちっ、くだらない事ばかり言って…」

そう言いながら、姉は何故か息を荒く、顔を赤くしていた。

それにしても、雨宮の飛び方もそうだが、一体何を言ったのだろうか。

「何？なんて言われたの？」 「煩い！！」

キッと、鋭い視線でボクを刺す姉。顔は相変わらず赤い。

内容は気になるが、聞かない方が身のためだろう。

姉は息を整え、ボクに向き直った。先程までとは打って変わって、真剣な、強い眼差し。

「…で、ここに何をしに来た？」

「別に…何も」

事件について、何か知っているのではないか。姉の視線は、そう語っていた。

「姉さんは、別に刑事じゃないだろ？」

ボクの言葉に、姉は溜め息を吐き、肩を竦めた。

「一つ、質問だ」

ピッと、人差し指を立てる姉。ボクは息を呑む。

姉の声が、耳に届く。

「黒衣の女を見なかったか？」

背中に冷たいものが流れる。動揺を、顔に出してはいけない。分かっているが、自分でも分かる程に、顔が引きつっている。

シーフィの事を、人に知らせるのは不味い。理由はない、これは直感だ。

それに、姉に話せば巻き込んでしまうかもしれない。それだけは避けたかった。

返事をしないボクを見て、姉は言葉が続けた。

「その女は、現場で度々目撃されている。私の考えでは、その女が犯人……」

「違うっっ!!」

思わず叫んでいた。周囲の人が、何かとボクを見る。ボクは俯き、地の雪を睨み付けた。一体、今ボクはどんな顔をしているのだろうか。

怒りか、悲しみか……、自分でも分からない。ただ、ボクの中ではっ

きりしているのは、彼女、シーフィは絶対に犯人ではない、その気持ちだけだ。

確固たる証拠はない。だが、別れ際のあの表情、あれを見た時、ボクは無条件で彼女を信じたいと思った。事件と彼女に、どのような関係があるのか、それは分からない。もし彼女が犯人ならば、ボクの身を案じるなど有り得ない。

彼女は確かに『普通』ではない。でも、紛れもない『女の子』なんだ。

それを、土曜日によく知った。だから、恩人でもある彼女を信じると決めたんだ。

紛れもない、ボクの意志で…

「…姉さん」

よくよく考えてみれば、あの叫びはボクがシーフィを知っていると肯定しているのと同じだ。

おそらく、姉はボクの反応を見るために、わざと言ったのだろう。まんまとはめられたわけだ。

姉はどんな顔をしているのだろうか。ボクは重たい頭を上げ、姉の顔を見た。

「…神夜」

姉がボクの名を呼ぶ。何を言われるのだろうか。言葉を聞かぬうちに、

手が震えている。

どうして自分は、こうも臆病なのだろうか。そんな自分が嫌になる。姉は強い視線でボクを見ている。射抜くようなその視線に、ボクは思わず後退る。

何をやってるんだ、ボクは。

信じると決めたんじゃないのか。

なら何故、後ろに下がる。

こんな事では、彼女を見つける事も、笑顔を見る事も出来ないじゃないか！

笑っていた方がいい。そう言ったのは誰だ？

他でもないボクじゃないか。

「姉さん、ゴメン。今は話せないけど、いつかちゃんと話すから…」
迷いはない、迷ってはいけない。人の目を気にしている場合じゃないんだ。

ボクは決意を固め、姉の目を見た。

弱い自分は捨てる。

さつきも決めた。これはボクの意志、そして思いだ。誰にもこの思いを歪める事は出来ない。

「……ふう」

視線が絡み合い、しばしの沈黙の後、姉は息を吐いた。何かを考えるように、目を閉じる。

そして、次に目を開いた時、その瞳には、優しい光が宿っていた。

「…先程、神夜が言った通り、私は刑事ではない。だから、神夜がその女とどういった関係だろうと、正直どうでもいい…、だがな…」

一度、そこで言葉を切る。眼差しが、また強くなった。

だが、ボクはもう、後退りはしなかった。

姉はボクをしっかりと、その目に捉え、言った。

「自分が正しいと思った事は、最後まで貫け。そして、諦めるな」

力強い姉の言葉。ボクはそれをしっかりと受け取り、頷いた。

すると、姉は満足したように、首を縦に振った。

「さつきは探るような事をしてすまない。ただ、お前の、神夜の身が心配だったんだ」

「……ありがとう」

姉が笑顔で言った言葉に、ボクも笑顔で返した。

「私も、その女が犯人だとは思っていない。…それに、神夜を変えてくれた人なのだろう？」

…この人は、どこまで知っているんだろう…。

ボクは苦笑いを浮かべ、それを答えにした。しかし、姉はそれだけで満足したようだ。

ボクは姉に一礼し、来た道に戻ろうと、踵を返した。

もう一度、彼女に会いたい。

あんな顔が最後だなんて、絶対に嫌だ。

彼女はまだ、この街にいる。

その僅かな希望を信じ、ボクは駆け出した。



「…まったく、世話の焼ける弟だ」

神流は、神夜の走り去った方を、じっと見つめながらそう言った。

「いいんですか？その女に弟くん渡して」

地べたを這いつくばりながら、神流を見上げる雨宮は、悪戯っぽくそう言った。

神流がボクシングの動きをする。それを見た雨宮は、「ひいっ!ごめんなさいっ?!」と言って、素早く立ち上がった。

それを見た神流は、軽く溜め息を吐く。

「いいんだよ。…ただ」

「ただ?」

神流が顎に手を当て、考え込む。雨宮は首を傾げながら神流を見る。

「…いや、何でもない」

神流はそう言いながら、首を大きく横に振る。

「そうですか?…それなら、早いところ取材しましょう。神流さんも、休み欲しいでしょ?」

そう言って、雨宮は現場付近へ戻っていった。

一人残された神流は、空を見上げる。東の空が、暗くなっていた。

「いや…やはり」

そう言い、神流も現場へ向かった。



二カ月が過ぎた。

その間、勉強をしながらも、毎日のようにシーフィを探した。

雪も疎らになり、今では道の端に少し残っているだけだ。

人生で初めて、友達と一緒に、自身の誕生日（十二月二十四日）を祝ったりもした。

しかし、何かが足りなかった。ボクの心に穴が出来たような、変な感覚。

決して楽しくないわけではなかった。空や学と一緒にいることは、ボクにとって嬉しい事だ。

それでも、やはり彼女がいないと駄目なのだ。ボクを救ってくれた、彼女がいないと…

「どうした？ 神ちゃん。あんま出来んかったんか？」

ボクが思い耽っていると、学がそう声を掛けてきた。

今日は私立の一般入試。ボクと学、そして空は、会場からの帰り道を歩いていた。

「いや、別にそうじゃないけど…」

そう答えながら頭を掻く。試験の問題は解けた。が、ボクが解けないのは別の問題だ。

「心配する必要ないで？…ほれ、空を見てみい」

「ん？」

学が、親指で空を指す。その指先を追って、空を見る。

そこには、試験の問題用紙を睨み付け。

「いや、あれは…やっぱり？…でもそうなるとお…」

ボソボソと、まるで呪詛を唱えるような空がいた。

はつきり言って、怖い。

「終わってからそんなネチネチと。意味ないやろ、ソレ」

学がそう言うと、空は眉尻をキツと吊り上げ、睨む対象を、問題用紙から学へ変更した。

「うっさあーいっ！？その余裕の態度がムカつくのよっ！！」

「何やお？！」

二人が口論を始める。これはいつものパターンだ。流石に慣れた。

「よくもまあ飽きないな、二人とも…」

逆にここまで来たら、凄いの一言だ。

だが、考えてほしい。

口論を始め、一人残され、結局、仲裁に入るのはボクだと言うことを…

「…はあ」

溜め息を一つ。

試験で疲れたのだ、仲裁はやめておこう。これ以上疲れたくはない。口論を続ける二人を放置し、今日はどこでシーフィを探そうか思案する。

二カ月。ずっと彼女を探し続けてきた。だがどれも空振り。

しかし、不思議と諦めは浮かんでこなかった。

信じていれば、いつかきっと会える。そう思ったから。

「…行って、みようかな」

ふと、初めてシーフィに会った場所を思い出した。

そういえば、最近は行くことが無かった。気持ちを新たにするためにも、良いかもしれない。

「…そろそろ止めるか？」

思い出して、学と空を見る。すると、二人は取っ組み合いの喧嘩を

始めていた。

ボクは、慌てて二人の間に入った。



「くっ…」

暗い路地裏に、私は身を隠した。

傷口が痛む。

血が溢れ、アイツに買ってもらった服が赤く染まってしまった。所々破れ、もう着ることは出来ないだろう。

それがとても悲しい。

思い出が一つ消えるような、不思議な感覚。

「ディネオのやつ…、手加減が無いな…」

明るい時間帯に攻めてくる。つまり、アイツも相当焦っているという事。

今まで一度も勝った事の無いアイツを焦らせている。それだけでも、多少の優越感に浸ることが出来る。

だが、そこでふと思う。

このまま逃げ続け、一体何になるのだろうか。

疲弊し、人々に迷惑をかけ…。

これは、私の我が儘ではないか？

逃げて、逃げて、逃げて…。

一体何が残った？

「……くそっ」

唇を噛む。プチンと、皮の破ける音と共に、口内に鉄の味が広がる。

神夜と最後に会ったのは、二カ月前だったか。

その二カ月は、実に無味乾燥な日々だった。

一日だけだったが、神夜と遊んだあの日は楽しかった。

出来るならば、もう一度。もう一度だけ、あの空気を味わいたい。

「行ってみるか…」

神夜と出会った場所。そうだ、あの場所へ行ってみよう。

時間はあまり無い。行くなら早く行ったほうがいいだろう。

そう思った私は、ゆっくりと足を前に踏み出した。



二人と別れ、ボクはあの場所へと向かっていた。

もう一度決意を固めるため、もう一度、勇気を持つために。

ふと、足を止めた。

クレーン車等が立ち並ぶ。そこは、二カ月前に崩壊した病院跡だった。

二カ月が経った今も、工事は完了していない。

生存者一名。姉から聞いた話では、小さな女の子らしい。確か、雪音という名前だった。

「あ……」

道の脇、そこに沢山の花が供えられていた。ボクは手を合わせる。

シーフィに会う前のボクでは、まず有り得ない行為だ。今では、素直な気持ちで冥福を祈ることが出来る。これも、彼女のお陰だ。

「ほら雪音？お花を置きましょう？」

隣から、女性の声が聞こえた。

見ると、六歳程の栗色の髪をした少女を連れた女性、おそらくは母親だろう。そして、少女は雪音と呼ばれていた。

「こんにちは」

「あ、どうも…」

母親と思われる女性と、挨拶を交わす。すると、雪音ちゃんも母親の真似をした。

「あの、雪音ちゃんって、あの…」

尋ねるのは善くないとは分かりながらも、聞かずにはいられなかった。もしかしたら、雪音ちゃんは何かを知っているかもしれないから。

「ええ…」

惨劇を思い出したのだろう。母親は、苦虫を噛み潰したような顔をする。仕方の無いことだが。

「聖原神夜です。以前、姉がお世話になったようで…」

ボクは頭を下げる。姉を使うのは正直避けたいが、どうしても話を聞きたかった。

「…神流さんの…、弟さん？」

女性は一瞬驚くが、すぐに笑顔を浮かべた。姉は偉大だと感じた。

だが、想像以上に反応を示したのは雪音ちゃんだった。

「ねえっ！ かななさんにあわせて！」

雪音ちゃんは、笑顔でボクに駆け寄ってきた。そして、愛らしい笑みでボクを見上げる。

「ん、じゃあ今度遊びにくる？」

ボクはしゃがみ、雪音ちゃんに視線を合わせ、彼女の頭を撫でた。

「ほんと？ …ねえ！ おかあさん、いいよね！」

太陽のような笑顔で、母親を見る雪音ちゃん。母親は少し困ったような顔をした。そして。

「…宜しいんですか？」

と言った。

「姉が休みの日は、ですけど」

ボクはそう言って笑う。母親もボクを見て笑った。しかし何故だろうか、その笑顔はどこか淋しそうだ。

会話を聞き、母の了承を得たと分かった雪音ちゃんは、飛び跳ねて喜んだ。

「仲良くしてあげてくださいね？」

雪音ちゃんを見て、そう言った。

そして、思い出したように言葉が続けた。

「自己紹介がまだでしたね？…私は四季秋音しき・あきねです」

「改めて、聖原神夜です」

互いに名前を交換する。騒いでいた雪音ちゃんが、やっと戻ってきた。

「ゆきねはゆきねだよ！よろしくね！」

「うん、よろしく」

また、雪音ちゃんの頭を撫でる。雪音ちゃんは嬉しそうに笑う。

「秋音さん。少し、雪音ちゃんに聞きたい事があるんですけど、良いですか？」

ボクの質問に、秋音さんは頷いた。



ボクは、雪音ちゃんから聞いた話を思い出しながら歩いていた。

病室にいたら、突然病院が崩壊を始めた事。

泣いていたところを、黒衣の女性に助けられた事。

その女性の特徴を聞くと、シーフィの特徴と一致した。

多分、姉に話した内容と大差ないだろう。姉は話してくれなかったが、そうだろうと感じた。

唯一の収穫と言えば。

「雪音ちゃん…か」

新しい友達が出来たので、よしとしよう。

四季親子と別れ、しばらく歩いた。廃ビルが近付き、人が少なくなる。

そして今、ボクの目の前には、崩れた廃ビルがあった。病院とは違い、復旧される雰囲気が無い。

ここは、言うなれば忘れられた場所。誰も訪れない、誰に必要とされない場所だ。

だが、ボクにとっては大切な場所だ。

思い出すように、二カ月前と同じように振り返り、向かいのビルを見上げた。

「……………え…」

屋上に、黒い…影。

足が勝手に動きだす。思考よりも先に、体が動く。

二カ月前と同じような感覚。ただ、彼女に会いたい。それだけで走る感覚。

息が切れる。足が痺れる。だが、その感覚が懐かしい。心が踊る。

屋上への扉が見えてくる。足の回転が、一段と速くなる。

そして。

ボクは扉の前に辿り着いた。

そして、一気に開け放った……



大きな音と共に、扉が開かれる。神夜は扉が開ききる前に、叫んだ。

「シーフィィィっ!!」

神夜の視線の先。そこにいたのは、体中に傷を作り、血に汚れ、膝を抱え蹲る、そんな見たこともない姿だったが。

紛れもないシーフィィだった。

勢い良く顔を上げるシーフィ。その視線が、神夜を捉える。

二カ月という時間は、あらゆる物を変えた。

地に積もる雪は消え、今は堅いコンクリート。

流れる風は、以前ほどの冷たさは帯びていない。

シーフィの姿も変わった。綺麗だった体は、傷だらけ。

だが、変わらない物もある。

神夜の気持ちは、初めて出会った時と同じだった。

ただ、会いたい。会わなければならない。その気持ちから、ここへやって来た。

シーフィの瞳には驚きが見えた。

対し、神夜の瞳には、喜びが滲みでていた。

神夜は深呼吸を二回、息を整える。そして、シーフィに向かい、笑顔で言った。

「…久しぶり、シーフィ」

一度離れた二人の運命。

その運命は、時を経て。

再び、この地で。

交わり、一つになった……

第五章く運命交差く（後書き）

感想、指摘などを頂ければ嬉しいです。よろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0037i/>

魔族の涙と神の涙

2010年10月17日01時57分発行